

新約聖書時代の社会と教会における
長老たち (Elders) について

—— 教会形成におけるリーダーシップ理解の一助として ——

松 見 俊

論文のテーマ設定

バプテスト教会の職制の特徴は、「牧師」と「執事」が立てられる二職制である¹。むしろ、「職制」とは言っても他の教派とは違い牧師や執事は、「身分」ではなく「職務」である。現在の日本のバプテスト教会では、教会の職務の担い手は、ほとんどの場合、「牧師」と「執事」と呼称される²。

しかし、新約聖書においては、教会の職務としての「牧師」という呼称は少なく（エフェソ4：11）、「使徒」、「預言者」の下、「教師」、「長老」、「監督」という呼称が支配的である。パウロはなぜか、教会の指導的職務の呼称として「長老」という用語を避けている。それは、新約聖書の他の文書における「長老たち」（πρεσβύτεροι）という呼称の多用と比較すると、顕著な特徴である。

1 日本キリスト教協議会信仰と職制委員会・日本カトリック教会エキュメニズム委員会編訳『洗礼・聖餐・職務 教会の見える一致をめざして』（日本基督教団出版局）1985年には「さまざまな職務の機構の中で、監督（司教、主教）と長老である牧師（司祭）と執事（助祭・輔祭）という三階層の職務が支配的である」とあるが（160頁）、バプテストはこの立場を取らない。

2 「神学論集」第72巻（2015年）23頁にも指摘しておいたが、「オランダのアムステルダムに居住するイギリス人の信仰告白」（1611年）、「スタンダード信仰告白」（1660年）、「第一ロンドン信仰告白」（1644年）、「第二ロンドン信仰告白」（1677年）には、「長老」(Elders, not Presbyters)という呼称が用いられ、「牧師」(Pastors)、「監督」(Bishops)、「長老」、「教師」(Teachers)がほぼ同義語として用いられている。

「モルモン教」の青年が「〇〇長老」という名札を付けて自転車に乗っているのを見ると何となく違和感を覚えるのは、パウロが「長老」という呼称を避けたこと（年齢や伝統で教会の職務の担い手を考えること）に繋がっているのかも知れない。

そこで、新約学的には「牧師」あるいは「監督」と「長老」は相互交換可能な意味内容を持った用語であるのかどうか、そもそも「長老」とはどのような内容を持った用語であるのかを明確にする必要がある。この論文の主要テーマはこのような新約学的テーマである。

しかし、その背後の実践神学的問いとしては、以下のような問いがある。先の論文において、バプテストが「監督」という呼称を用いなくなったことで、牧師が、個別教会会衆の牧会と教会管理の働きにおけるリーダーシップの理解における「全体を見渡す」働きが薄められているのではないかと問うた。そして、「執事」もまた、「み言葉のご用」より専ら「パンの配給」の働きに自己限定し、積極的に執事会を形成し、教会形成的リーダーシップを担う姿勢を失いかけてはいないかと問うた。「長老」に関しても同じような実践神学的問いがある。長老主義教会 (Presbyterian Church) においては、長老は、み言葉の宣教、聖礼典の執行、教えることを主要な職務とする「宣教長老」と牧会や教会のリーダーシップを分担する「治会長老」とに区別される。牧師は、宣教長老であると共に「治会長老」でもあって、他の治会長老たちと共に、個別教会を超えて「長老会」(presbytery) を形成すると言われる³。長老主義教会においては、まさに、この「長老会＝中会」こそ「教会」であり、各個教会主義あるいは「会衆主義」教会とは、ここに違いがあるわけである。長老主義教会においては、「執事」は、まさに「パンの配給」に関する仕事を担い、礼典執行の補助と、あくまで個別教会内部の仕事に限定されている。そうだとすると、「長老」という呼称を用いないバプテスト教会では、牧師ではないが、牧会や教会形成におけるリーダーシップを分かち合う「治会長老」の仕事が手薄になり、何でも牧師任せの「執事」となり、あるいは、執事の仕事までこなす「便利屋さん」

3 竹森満佐一『教会と長老』（東神大パンフレット No.24）1985年、93頁以下。『キリスト教大事典』教文館 1968年、700頁参照。

的牧師になってはいないかという問題が生じる可能性がある。今後直面するであろう課題は、無牧師の個別教会が生まれ、執事あるいは信徒が説教し、礼典を執行し、牧会を担当する必要が生まれることである。バプテスト教会の執事たちあるいは信徒リーダーたちは、長老主義が採用している「治会長老」の働きをもっと学ぶ必要がないであろうか。そして「治会長老」の一人でもあり、「み言葉」の説教者と教師である「長老」と働きが重なるバプテストの牧師は、そのような執事たちをみ言葉によって教育する働きが期待され、また、牧会や教会形成の働きを積極的に執事たちに委託する姿勢が重要ではないだろうか。

元来、バプテスト教会においては、「牧師職」や「執事職」があって、教会が運営されるのではなく、逆に、自立した信徒たちからなる「会衆」全体に福音宣教の使命 (ミッションズ) が与えられ、その実現のために信徒同士の間で「仕事の分担」が始まるはずである。無牧師となっても決して、教会や牧会の働きが無くなるわけではない。むしろ、専ら「み言葉」の説教を担う指導者は大切である。み言葉の説教が教会形成上、重要であるからこそ、基本的には牧師が立てられ、牧師は尊敬されるべき (あくまでもみ言葉の宣教が尊重されるべきであり、また、会衆が牧師を選立しているという責任根拠で) である。そのことを踏まえて、教会に与えられた働きの分担のあり方をフレキシブルに学ぶことが大切なのである。

以上の実践神学的課題をその背後の問題意識として、そもそも「長老」とは新約聖書において、また、その背後のヘブライ語聖書の伝統やヘレニズムの伝統においてどのような意味を持っていたのかを吟味することがこの小論の課題である。

1. 資料

新約聖書における「長老」について考察するとき、『新約聖書神学辞典』(Theologisches Woerterbuch zum Neuen Testament) IVにおいて、G.ボルンカムが書いている「πρέσβυς, πρεσβύτερος, πρεσβύτης, συμπρεσβύτερος,

πρεσβυτέριον, πρεσβεύω」651頁～683頁⁴を参照にすることが基本であろう。あるいは短いものではあるが、前出の辞典とは方法論を新たにする『ギリシヤ語新約聖書釈義辞典』(Exegetisches Woerterbuch zum Neuen Testament) IIIのJ.ローデによる「πρεσβυτέριον(長老会), πρεσβύτερος(年長の, 長老)の項目の吟味が出発点であろう⁵。さらに、これらの文献の上に、R. Alaster Campbell, *The Elders: Seniority within Earliest Christianity* を利用した⁶。この著書は彼の博士論文に手を加えたものであるが、キャンベルは、英国国教会－メソジストからバプテスト教会に転入会した経歴がある。最近と言っても少し古い⁷が、1990年代以降の英国バプテストの動向理解に参考となろう⁷。また、前回論文で紹介した、Andrew D. Clarke, *A Pauline Theology of Church Leadership*⁸を参考にした。そして、少し古い⁷が、第二ヴァチカン公会議後のローマ・カトリック教会の動向も一瞥するため、Stephan B. Clark, *Unordained Elders and Renewal Community* にも目を通した。

4 Begrundet von Gerhard Kittel, herausgegeben von G. Friedrich, Stuttgart/Verlag Kohlhammer, 1959.

5 Stuttgart/Verlag Kohlhammer, 1983. 邦訳『ギリシヤ語新約聖書釈義辞典III』(教文館) 1995年, 181～183頁。

6 Edinburgh/T & T Clark, 1994.

7 彼は、「序」に以下のように語っている。「教会の職制 (order) の問いは、英国国教会－メソジスト連合のスキームが、監督制と叙階 (按手礼) に対して、それらが (もはや) 正当とは認められない主張であるという暗礁に乗り上げた私の学生時代以来、常に、私の関心の的であり続けた。私はその後、あるバプテスト教会に加わり、事実、バプテストの教職者となった。その結果、使徒継承についての諸問題は、むしろ疎遠のもののように思えるようになった。しかし、カリスマの更新運動の襲撃が自由教会を襲い、今度は、再び、組織とは何かという自由教会の構造を考えるように私を強いたのだ。英国 (スコットランドを除くイギリス) の多くのバプテスト諸教会は、彼らの伝統的な執事たちに加えて、長老たち (elders) を任命し始め、そして、そうすることによって、彼らは新約聖書の教会秩序に戻ったと信じたのであった。」。英国のバプテストのすべての教会ではないにせよ、カリスマ運動への反動として「長老」を導入していたとはまさに私には驚きである。私が執事に対して期待しているものを「長老」に期待したのであろうか。もちろん、キャンベルは、これに反対して、「長老」とは、公的職務の呼称ではなく、ギリシヤ社会でもユダヤ教社会でも、古代社会を通して、「年長者性」(seniority) を意味し、「榮譽的」(ehrenvoll) 呼称であると論じている。単に、新しい呼称を導入すれば済む話ではないのであろう。

8 Edinburgh/T & T Clark, 2008.

2. Presbyteros, Presbyterion, Sympresbyteros の言語的意味と由来

プレズビュテロスは、プレズビスの比較級であり、「より年老いた」あるいは、単に、「年取った」ことを意味している。古代社会において、「プレズビュテロス」は否定的な意味というより、むしろ、尊敬の念で語られていた⁹。

創世記18：11～12「アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人となっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである」は明白に年齢のことを述べており、ヨハネ8：9「これを聞いて年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい」や使徒言行録2：17、これはヨエル書からの引用であるが、「若者は幻を見、老人は夢を見る」も同様に、単に年齢を意味している。このような用法はプレズビュテロスの第一段階の用法であろう。

ユダヤ教とキリスト教の領域では、それが年齢の表示であるのか、あるいは、ある職務の称号なのかを区別するのが困難な事例がある。年長者は、尊敬された者として、ある集団の代表者、種々のガイドや委員会のメンバー、村の官吏、祭司たちの代表委員会、異なったタイプの年長者の集団の構成員を意味する。これが、プレズビュテロスからその協議会であるプレズビュテリオンへの語義の発展の第二段階である。この段階では、尊敬を含んだこの用語が何かの職務の呼称であるかどうかは、この用語自体からというより、この用語が、地方の官僚組織 (oertliche Behoerde)、ユダヤ教の会堂、あるいは、キリスト教会の管理者 (die Vorsteher) のような、団体のメンバーである場合に神学研究の問題となるのである。

また、別の箇所、例えばマタイ15：2「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人 (プレズビュテロン) の言い伝えを破るのですか」というファリサイ派のイ

9 Bornkamm, op.cit, 562. 現代日本社会は、「超高齢社会」と定義され、「後期高齢者」などという術語が用いられ、「敬老の日」などと「年老いた者」が持ち上げられているようであるが、介護費用の増大、老々介護の大変さからお荷物扱いされていないであろうか。

エスへの批判は、これらの人々が神の戒めの「伝統の担い手」であるように見える。むしろ、ただ高齢者であるというのではなく、神への信仰に生きた高齢者たちは、それだけ長く、まさに神の律法と真実への証言者であったのだろう。

プレズビュテリオン（長老会）は、キリスト教以前には、唯一旧約聖書外典「スザンナ物語」に登場するが¹⁰、新約聖書においてはこの語は、通常、「サンヒドリン」を意味している。「夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まってきた」（ルカ22:66）とあり、使徒言行録20:5には、サウロにキリスト者迫害の許可を与えた主体として、「大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます」と言われており、ルカは、エルサレルのユダヤ議会のある構成員をこの用語で表現した¹¹。これが、「長老たち」の語義の第三段階である。

この用語はさらに、Iテモテ4:14において、キリスト教会の長老協議会（der Aeltestenrat christlicher Gemeinde）を意味しているとボルンカムは理解する¹²。そこでは、「その賜物は、長老たちがあなたに手を置いたとき、預言によって与えられたものです」と言われている。この記述についてボルンカムは以下のように語る。

この用語はイグナチオスに驚くほど共通している（使徒教父の別の箇所にはないのに、13回用いられている。それは監督と執事と共に生じる。エフェソ人への手紙2:2, 4:1, 20:2, マグネシア人へ

10 舞台はバビロニアのユダヤ人社会である。民より二人の長老（οἱ δύο πρεσβύτεροι）が任命されるが、庭園にいた美しいスザンナに情を燃やし、彼女を偽証で落とす悪人たちであった。506では、スザンナの嫌疑を晴らすべく、「長老会」において語る資格を与えられたダニエルが登場する。Septuaginta II, Stuttgart/Wuerttenberger Bibelanstalt, 1965, 864, 868.（日本聖公会アポクリファ翻訳委員会『アポクリファ 旧約聖書外典』（日本聖公会出版部）1968年、322, 325頁。『聖書外典偽典第二巻』教文館1977年 291頁、概説は274～275頁。ボルンカムは、ここでの「長老会」は「神によって授けられた長老たちの尊厳」（die gottverliehene Aeltesten-wuerde）を意味していると言う。

11 J. Rohde, 『ギリシヤ語新約聖書釈義辞典Ⅲ』181頁。

12 Bornkamm, op. cit., 654.

の手紙 2, トラレイス人への手紙 2 : 2, 13 : 2, スミルナ人への手紙 8 : 1。イグナチオスによれば, この長老たちの階層的地位は, 使徒たちのそれに対応しており, アポストロイはフィラデルフィア人への手紙 5 : 1 においては教会の長老会と呼ばれることができた。この長老会は監督たちの協議会 (συνέδριον) であり (フィラデルフィア 8 : 1), そして, この後者は「神の場所に」立つゆえに, それは神の協議会である (トラレイス人への手紙 3 : 1)。

私には, このボルンカムの解釈は, 行き過ぎているように思う。牧会書簡からイグナチオスを経て, 古カトリック教会への直線的な三職制論が先取りされて, 現在の三職制論を正当化するために用いられてはいないだろうか。しかし, これは「プレズビュテロス」の用法の第四段階, あるいは第四の語義であり, キリスト教会のある職務の呼称となっている。

スムプレズビュテロスは, 新約聖書に一度だけ I ペトロ 5 : 1 に用いられている。この手紙の 5 章では 1 節において, 「長老の一人」(スムプレズビュテロス) である著者がまず, 教会の「長老たち」に向かって勧告し, 5 節において, 若者たちに「長老たち」に従うように勧めている。なるほど, この文脈において, 長老の仕事が, 「神の羊の群れを牧しなさい (エピスコポウンテス = 監督しなさい)」と言われている。しかし, ボルンカムが, 「のちにそれは, συλλειτουργός, συμμύστης (そして, ラテン語の同等語) のように, 教会の長老たちに向けられて, 監督たちによって用いられた良く知られた同僚的呼びかけの形態 (geläufige kollegiale Anredeform) のなのである」と言うとき, やはり, 新約聖書のこの段階で, 権威を帯びた長老団や監督団を想定することは行き過ぎではないだろうか。

このような「長老たち」の用語の外観をもって, まず, イスラエルとユダにおける「長老たち」を考えてみよう。

3. イスラエルとユダにおける「長老たち」

「長老たち（ハゼケニーム）」は、ヘブライ語聖書のあらゆる資料層においてその存在が「前提されたもの」として取り扱われている。つまり、彼らが任命されたことや「長老会」など彼らの団体がどのように社会的に確立されたのかの記録を持っていないからである。ここから、「長老」の持つ、本来の内容の「つかみにくさ」（elusiveness）¹³が由来してもいる。

3-1 J資料とE資料における古代の長老たち

「長老たち」の起源は、最古の家父長的時代に遡るのであり、国家的覇権を確立するずっと以前の段階では、イスラエル社会は、諸氏族（Sippen）から形成されていたのである。核大家族の長が集まり、氏族を形成し、その長たちが族長となる。そして、「偉大な家族たち、あるいは、諸氏族の長たちとして、彼らはそのあとに生成過程にあったより大きな連合体における指導者たちであった¹⁴。」しかし、ボルンカムは、「一つの国家としてのイスラエルの発展の物語の最古の資料、つまり、J資料とE資料において、彼らと部族連合との関係を（歴史的に）跡付けることはほとんどできない。いまや常に、長老たちは

13 R. A. Campbell, *op. cit.*, 20. リヴァイは、ヘブライ語聖書の長老に関する記述は「情報の全体数が極く少なく、彼ら（長老たち）への言及は彼らの真の重要性を反映していない。その結果、聖書の断片的証拠は古代中近東における他の同時代の社会について知られていることへの言及によって、そして、今日にいたるまでのベドウィン集団の研究から、補足されるか解釈されている。」と言う。H. Reviv, *The Elders of Ancient Israel*, Jerusalem/Magnes, 1989, 9.

14 Bornkamm, *op. cit.*, 655. イスラエル国家は「諸部族（tribes）からなり、それら自身は氏族たち（clans）からなり、これらは拡大家族（extended families）からなり、これらの諸単位と下位諸単位の各々が指導者のために彼らの間で年長の男性たち（the senior males）に頼っていた…家の長は彼自身の家で決断を行い、そして、また、村の共同体の協議会でその家族を代表した。そのような家族の長たちは集合的にその共同体の内部の秩序を整え、また、それらの外部に対して家々を代表した。これらが長老たちとして記述された人々である」。(Campbell, *op. cit.*, 21.) このような組織の例証は士師記6：11-32のギデオン物語に見られる。特に15節参照のこと。ヨシユア7：14以下、1サムエル10：20以下参照。Campbell, *op. cit.*, 21の footnote6, 7を参照。

全民衆の代表者ではあるが、単なる代表という意味においてだけであって、いかなる主導的あるいは統治的権力を持たず、モーセとヨシユアのような指導的人物たちと共に、彼らの下での全国民の代表者として立ち現れてくるだけである¹⁵。」と言う。キャンベルは「長老たち」は、「沈黙する集団を形成している¹⁶」と言う。出エジプト3：16では、モーセは主なる神を代弁して「さあ、行って、イスラエルの長老たちを集め、言うがよい。『あなたたちの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である主がわたしに現れて、こう言われた』」と言っている。出エジプト12：21で、「長老たち」は、過越の祭りを監督し、19：7では彼らがシナイ山での啓示を受け取っている。「モーセは戻って、民の長老たちを呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語った」。ヨシユア記では、「長老たち」は、ヨシユアと共にアイに攻め上りる(8：10)。

シケムの契約物語では、「イスラエルの長老、長、裁判人、役人」がヨシユアによって呼び集められた(24：1)。ここでは、「長老」が「裁判人」(士師)、「役人」と並んで登場している。民数記では、モーセの働きを補助するため、「イスラエルの長老たちの内から、あなたが、民の長老及び役人として認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れてきてあなたの傍らに立たせなさい」(11：16)と主はモーセに命じている。ここにも「役人」が登場する。同じような「長老たち」の七十人の任命は、出エジプト24：1、9にも登場する。また、エテロの忠告に従って千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長が民の長に選ばれた場面では、「長老たち」はモーセ、エトロ、アロンと共に食事を

15 Ibid. ヴォルフは「長老たち」が「全イスラエル」と相互互換的に表れることから「長老たち」はイスラエル全体の男性自由民」と等置されると言う。C. U. Wolf, "Traces of Primitive Democracy in Ancient Israel," *JNES*, 6(1947) 99. 特に、ヨシユア 24：1 以下、士師 8：14、列王上 8：1 以下参照。しかし、直接民主制を古代イスラエルに読み込むことは多くの批判がある。しかし、キャンベルは、「長老たち」が上から任命されたのではなく、下から認知されて権威を持ったという意味でヴォルフの主張にも真理契機があるとと言う。22. 出エジプト 3：16、24：1 の記述は時代錯誤的であり、モーセと至上の役割とイスラエルの初期の統一性を強調するために用いられているのであり、現実には、君主制下の長老たちの国家的役割を反映しているという説もある。J. Conrad, 「ザーケン」 in *TWAT*, IV, Stuttgart, 1980, 87ff. Reviv, op. cit., 22-29.

16 Campbell, op. cit., 23.

取るために集まられているだけで、それぞれの集団の長との関係は明確ではない(出18:12ff)。ボルンカムは、出エジプト24章と民数記11章の七十人の長老の選立は、後のサンヒドリンのモデルとなり、ラビ的挨拶の根拠となったと指摘している¹⁷。私としては、特に、出エジプト24章には、アロン、ナダブ、アビラなど祭司系の名と共に「長老たち」が登場し、ヨシユア24:1、民数記11:16では「長老たち」が、「役人」や「裁判人」と並列されているが、この並列が同じ職務を現しているというより、祭司、裁判人、役人たちという役職(office)とは異なった「民の代表者」として異質なものの併存であるとも理解可能であると思う。確かに、単なる民の代表から職務の担い手へという発展は、ボルンカムの言うように、歴史的にありそうなことではあるが、この段階での「長老たち」は家族、氏族、種族の代表として統治的権力は持っていない全会衆の代表であったとみるべきであろう。しかし、ヨシユア記、民数記には、次の士師の時代、王国時代の「長老たち」への移行が散見されるとも言えよう。

3-2 士師たちと君主制の時代の長老たち

ボルンカムによれば、この時期の「長老たち」は、単に漠然と民の「代表」であるというより、地方自治組織の指導的成員であり、彼らは、政治的、軍事的、司法的事柄を決める働きを担っていた¹⁸。そのような地方的長老たちに加えて、士師記11:5、サムエル上30:26などにおいては、「ギレアドの長老たち」、「ユダの長老たち」のように、ある地方あるいはある部族からの長老が指導的な人々として呼び集められたようであり、しばしば、「イスラエルの長老たち」と呼ばれていた(サムエル下3:17、5:3)。サムエル上4:3以下では、「イスラエルの長老たち」が、神の箱を担ぎ、8:4では「イスラエルの長老」は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、王を立てることを要求し、サムエル下5:3では、イスラエルの長老たちがヘブロンに集まり、ダビデを王に選立した。しかし、やがて彼らは、ダビデを退位させ、アブサロムを立て

17 Bornkamm, op. cit., 656.

18 Campbell は「村の長老たちの役割はたぶん変わることなく留まったが、国レベルでは、君主制の勃興と後退と共に変化した」と理解している。22-23.

る (サムエル下17:3)。列王記上8:1では、「ソロモンは、そこでイスラエルの長老、すべての部族長、イスラエル人諸家系の首長をエルサレムの自分のもとに召集した」と言われ、「長老たち」はイスラエルの民衆を代表して、政治的決定に大きな影響力を有している。ボルンカムによれば、特に戦争の時に、彼らは重要な役割を担い、支配する王たちにアドヴァイスを行ったが、彼らの影響力は、「(王の周辺の) 宮廷官僚制の勃興と共に、はっきり減退した。だが、彼らはいまだある権力を持ち続け、王家は、危機的状況下では (列王記上20:7以下)、あるいは、重要な決断を実行する場合には (列王記上21:8, 11)、彼らを当てにせねばならなかった。列王記下6:32と10:1, 5は、支配者たちに対する預言者的、政治的対峙は、長老たちの支持を求めそしてそれを見出したことを示している¹⁹。」と主張している。もっとも、「長老たち」が民の代表としてある政治権力を有していたとしても、「君主制の下で、長老たちは王宮の官吏たちと王に対して相対的に権力を失う傾向にあった」という総括が当たってよう²⁰。さらに、変化が、「長老たち」と王宮の官僚たちの間に起こっただけではなく (ヘブライ語「sar」が種族の長老たちだけではなく、宮廷の官僚たちにも用いられるようになったことから、ある長老たちは王宮の官僚に採用されたと考えられる)、「長老たち」と民全体の間にも生じたことである。J. マッケンジーは「あるギャップが、長老たちと民全体との間に現れてきた。それは、長老たちが全イスラエルの代表たちであった時には考えることのできないものであったろう。²¹」と主張している。

3-3 申命記における長老たち

申命記19:11~12では「しかし、もしある者が隣人を憎み、待ち伏せて襲いかかって打ち殺し、これらの町に逃れたならば、その犯人を出した町の長老たちは、人を遣わして彼を捕らえ、復讐する者の手に引き渡して殺さねばならない」と命じられ、ある地方的な領域に限定して「長老たち」に特別な権限を

19 Bornkamm. op.cit.,657.

20 Campbell, op. cit., 23.

21 J. L. McKenzie, 'Elders in the Old Testament,' in: J. L. McKenzie, 'Elders in the Old Testament,' in: *Biblica* 40 (1959) 539. Quoted by Campbell, 24.

与えている（参照21：18以下，22：13以下）。申命記1：16は役人としての「裁判官」について言及し，20：5と8は「役人」に言及し，21：2では「長老及び裁判官」が並列されている。このような証拠から，役人，裁判官が新たに任命され，長老たちは彼らと共に，限定された権限を他の地方的同僚たちと分かち合っていたとボルンカムは考える²²。しかし，申命記29：9では，イスラエルの全会衆が主の前に集められる時に，「部族の長，長老，役人，イスラエルのすべての男子」と言われ，「長老たち」は部族の長の次に，役人の前に置かれており，彼らは何か公的な仕事を持つというより，特別な職務の担い手たちと共に言及されているだけであるというキャンベルの解釈にも耳を傾ける必要がある。

3-4 捕囚期及び捕囚期後の長老たち

エレミヤ26：17には，「この地の長老たちが数人立ち上がり，民の全会衆に向かって言った」とあり，彼らはエルサレムの高官たち，祭司と預言者たちの判断に異議を唱え，その支持をエレミヤに嘆願している。地方の「長老たち」と比較すると，全民衆を代表するエルサレムの「長老たち」は墮落し，偶像礼拝を行っている。（エゼキエル8章）こうして，パレスチナに残った人々の中で「長老たち」はいまだある役割を果たしているのを見ることができる。

エレミヤ29：1，エゼキエル14：1，20：1，3によれば，バビロン捕囚地の民の中の「イスラエルの長老たち」はエゼキエルを訪問している。捕囚地においては，他のあらゆる政治形態が崩壊し，そのような状況下で，「個々の家族」が重要な役割を果たすが，家族を代表する長老たちが，民を代表して，限定された自己統治を行使する者たちとしてその重要度を獲得したと言えよう²³。そのような文脈において「長老たち」と呼ばれてはいるが，「諸家族の長たち」

22 Campbell は指導性と結びついたヘブライ語はいくつもあり，sar, nasi, nadib そして rosh を挙げ，RSV では「プリンス」(prince)，「貴族」(noble)，「役人」(official)，「かしら」(head) などと翻訳されているという。op. cit., 24.

23 キャンベルはここでもあくまで，「長老たち」は民を代表しているだけであり，「しかし，君主制の消滅と共に，長老たちは民の代表としての彼らの以前の役割の幾らかを再獲得した」と言う。Campbell, op. cit., 24.

が登場することは興味深い。ギリシヤ語七十人訳では「プレズビュテロス」と翻訳されてはいるが、アラム語は「シャープ」である。捕囚後のエルサレムとその近郊では、これらの「諸家族の長」あるいは「貴族」たちが新しい共同体の基礎となったと推測できる。これらの人々は民衆の頭たちであり、ペルシヤ政府は彼らを小さな宗教国家の再建のための交渉相手としたのであろう。ヴァン・デル・プロイクは「捕囚後のイスラエルは書物の民となったのであり、長老たちは彼らの良く知られた司法的役割を失う傾向にあった。律法に学んだ律法学者たちによって影が薄くなり、ある程度取って替わられた²⁴」と主張しているが、有力な家族の長たちは、第二神殿時期の間にもある重要な役割を果たしていたと見てよいであろう。

こうして、「長老たち」はパレスチナに残った民衆たちの間でも、捕囚の地においても一定の役割を果たし、また捕囚後のイスラエルでも役割を果たしている。しかし、ネヘミヤ 2 : 16, 4 : 8, 13, 5 : 7, 7 : 7 などから推測すると、ネヘミヤは新興「貴族、名望家」には葛藤を覚えていたようである。ボルンカムは、「これらの『元老たち (Senatoren)』 (ハセガニーム) はネヘミヤ 5 : 17 では、150人であり、国の統治者の食卓に日々の客として現れている²⁵」と言う。そして、ボルンカムは、長老、貴族のような「この豊かな交換可能な同義語と大きな人数は、この集団が、ある職務的な協働 (behoerliche Koepershaft) というよりむしろ、貴族たちの集会のようなもの (eine Notablnversammlung) であることを示している」と述べ、「長老たち」がある官職ではなく、名望家的参議であることを強調している。

3-5 エルサレムのサンヒドリンにおける「長老たち」

長老たちの協議会としてのサンヒドリン (gerousia のちの synedrion) の始まりは、ペルシヤ時代に遡るとボルンカムは看做している。最初はあらゆるメンバーが「長老」と呼ばれていたが、律法学者と祭司 (この家族から大祭司とサ

24 J. von der Ploeg, 'Les anciens l'Ancien Testament,' in : Lex Tua Veritas : Festschrift, H. Hunker, Trier: Paulinus, 1961, 188-9. Quoted by Campbell, 24.

25 Bornkamm, op. cit., 658.

ンヘドリンの長が選ばれる)と区別され、次第に、それ以外の人たちが「長老たち」と呼ばれるようになった。ここでもボルンカムは「サンヒドリンの監督は決して長老たちの手にはないことは明白である²⁶。」と語り、公職の担い手と長老たちを区別する。そして、さらに、エルサレムの陥落後、72名からなるヤムニヤのサンヒドリンは、コントロール機能を持つてはいるが、いかなる政治的権力を持たず、ただ限定的な司法権を持つているにすぎなかった。それは、「今や、もはや祭司の官僚制と平信徒 (Laienadel) は存在せず、排他的に、ファリサイ派の律法学者たちから成っている²⁷。」と言い、ここでも「長老たち」は、公的職務の担い手ではなく、信徒集団の代表である。

3-6 律法学者を意味する Zāqên (年老者)

このような発展の観点からして、ユダヤ教的伝統は、栄誉ある称号として zāqên を「指導的で年老いた学者」に授与したことによって、この称号とサンヘドリンの会員とを結びつけたのであろうとボルンカムは推測している。当然、この種の zāqên は常に一人の教師として権威づけられねばならなかった。この「教師」と「年老いた者」の同一的使用が、ミシュナにおいては叙階された学者たちがゼケニームと呼ばれたことを理解する助けとなるであろうと言う。むしろ、すべての学者が事実として「年老いた者」ではなかったであろうとボルンカムは推測する。「学者」(ハーコム)は、より広い意味を持ち、特別の栄誉的呼称である「ザーケン」は、ほとんど参議に預る「元老」(Senetor)に近いのであろう。このようなミシュナにおける「ハコミーム」(学者たち)と「ゼケニーム」の同義語扱いは、七十人訳の伝説において、学識ある72名の「プレズビュテロイ」が任命されたことと軌を一にしているとブルンカムは主張する。

3-7 ヘレニズムユダヤ教における「長老たち」

後期ユダヤ教において「プレズビュテロイ」(長老たち)は、ディアスポラのユダヤ人たちの間ではあまり知られていないが、この用語は、「年取った者

26 Ibid., 659.

27 Ibid.

たち」, 「注目すべき市民たち」, つまり, 指導的な家族の長老たちの意味で継続して用いられた。彼らは地方の当局やシナゴグの協議会のメンバーであった。

3-8 まとめ

以上のイスラエル社会における「長老たち」の役割の変化の歴史は以下のように総括できる。1) 年老いた者への尊称であった「長老たち」が, 2) 家族, 氏族, 種族を代表する者たちの意味になり, 3) やがて, 「役人」「裁判人」(士師) という役職やカリスマの担い手と並んで部族やイスラエルを代表する者となったこと, 基本的に, 「長老たち」は, 群れの代表ではあっても, ある職務 (office) の保持者たちではなかった²⁸。「『長老たち』は共同体の年長者たちであり, その内部の指導的家族らのかしらであり, そのようなものとして, 正規ではない (informal), 代表的な, また, 集合的なものであった。それは, フレキシブルであり, また, 漠然としている用語である」²⁹。4) 捕囚期においては捕囚地においてもペレスチナ残留民においても「長老たち」の一定の役割は保存されたが, 特に, 「諸家族」と呼ばれる「貴族」たちが台頭し, 「長老たち」とは重なりながら, 「長老たち」はどちらかと言えば, 民の代表としてのエルサレム指導者たちの食客, 「貴族たち」はかなり政治力, 行政力を有するようになったこと, こうして, 「長老たち」は特殊な職務の保持者たちではないが, しかし, 「それらを排除することもなく, 容易に, もっと正確な職務の称号と関連づけることができる。そうしたくない著者はそれを使うことを義務づけられてはいず, また, 地方の官僚をある広がりのある他の称号によって記述できる³⁰。」これはキャンベルの解釈である。そして, 5) 地方とエルサレムのサンヒドリンにおいて, その初期においては「長老たち」と律法学者, 祭司との区別は曖昧であったが, 徐々に, 公職の担い手としての「律法学者」, 「祭司」と区別されるようになったこと, そして, さらに, 「律法学者」と「長老たち」(ゼケニーム) が同義語のようになったこと, 6) 最終的には, ヤムニヤのサンヒドリンは限定的な司法権だけを許され, 祭司的官僚と民を代表する「長老

28 Campbell, op. cit., 65.

29 Ibid.

30 Ibid.

たちは」を欠いて、ファリサイ派の律法学者から構成されるようになったことを学んだ。

「長老たち」は、ある程度、民を代表して指導者に対する参議的役割を果たすが、基本的には、民や国の行政指導者たち、祭司、士師、役人などの公的職務の担い手ではなく、「信仰者集団の代表的役割」を担ってきた。「公的職務の担い手たちは、(長老たちに)含まれうるが、しかし、この言葉(「長老たち」)は、共同体におけるその威信 (prestige) が、そのような人々に限られてはいないことのひとつのしるしなのである。³¹⁾

この論文の中心的テーマである新約聖書における教会の「長老たち」の役割に話題を絞る前に、ヘレニズム(グレコ・ローマン)社会における「長老たち」を一瞥しておこう。「最初期のキリスト教は、グレコ・ローマン社会の内部でその最初の成長期を経験したユダヤ教の一つの運動であった」³²⁾からである。

4. ヘレニズム社会における「長老たち」

キャンベルはその著書『長老たちについて 最初期キリスト教における年長者 (Seniority)』において、ヘレニズム社会における「長老たち」を記述している。その記述に従い「ヘレニズム社会における長老たち」について略述しておこう。

4-1 グレコ・ローマン社会組織構成史 (Constitutional History³³⁾) における「長老たち」

ホメロスにおいて知られるギリシヤ人たちによる政府の最古の形態は、貴族政治 (aristocracy) のひとつの形態であった。そこには、その民の福祉に責任を

31 Ibid.

32 Campbell, op. cit., 67.

33 Bornkamm はイスラエル・ユダヤ教における「長老たち」を扱う際に、Verfassungsgeschichte という言葉を用いている。655.

持つ、王、あるいは、部族の指導者がいた。そのような王に求められた資質は、ヘブライ語聖書の王に求められたものに似ていたとキャンベルは主張する³⁴。「王は長老たちの協議会に囲まれており、彼ら自身も時には、王たちと呼ばれており、また、強力な氏族たち (clans) と家族たちの頭たちである。その王は、彼の裁量によって長老たちを呼び出し、必要であれば人民の一般的な集会を召喚する。指導的な語り手は長老たちあり、人民は発声投票 (acclamation) によって彼らの賛同を示す³⁵。」『イリアデ』 2 : 53において、アガ멤ノンは長老たちの協議会を召喚する。『オデュセウス』 7 : 136ff で、オデュセウスはその長老たちの真ん中に座っているフェニキア王を発見する。(両者においてはむしろ「プレズビュテロス」ではなく、「ゲロンテス」が用いられている)

アテネの初期の歴史は、貴族政治が民主主義に移行する歴史を示している。ソロンの改革 (紀元前594年) は、貴族と人民の間を調停するものであった。彼は、人民が債務奴隷になることを防ぐため、土地を再分配し、家族にかかわりなく富んだ人民を「執政官」に取り立てた。ソロンの改革で最も重要なことは、全人民が参加し、籤で決められた陪審員が法廷で役人を訴えることができることで、これが後のアテネの民主制のモデルとなったのである。元は王の協議会であったアレオパゴスの古代の協議会は、先の「執政官たち」によって増員された (4部族それぞれ100人からなる400人)。この集団は、アテネ都市国家の「長老たち」と呼ばれるが、実は、その権力な小さなものであり、執政官たちが籤で任命された487年以降は政治的重要性を失いかけていた。それ以降の改革においては、ὁ δῆμος あるいは ἡ ἐκκλησία (まさに、新約聖書の教会と同じ用語である) として知られる市民たちの集会が強められた。30歳以上の男性自由民の会合は籤によって βουλή という協議会を選んだ。そして、9名の執政官が各々のエクレシアの願いに対応した。紀元前五世紀がアテネの民主制の全盛期であった。ペロポネソス戦争の敗戦後、民主主義は生き残ったが、アテネはマケドニアに服することとなった。ヘレニズムとローマ期において、「ゲルウシア γερουσία」(長老会・元老院) の権力は縮小され、アレクサン

34 Campbell, op. cit., 69.

35 Ibid.

ダー大王の死後、彼の帝国は分割され、王たちによって支配された分裂国家となった。ユダヤ人たちが、エジプトのプトレマイオス王朝とシリアのセレウコス王朝の下で、ギリシャ文明を最初に経験したのは、まさに、この時期であった。王たちは、どこでもそうであるように彼らの協議会を廃止しなかったが、それらは地方の貴族たちから成っていたのではなく、王によって選ばれた官僚たちから構成されるようになり、結果的に「長老たち」という呼称は見られなくなった。

ローマが地中海の覇権を握ると、権力は王たちと彼らを囲む長老たちの手から皇帝の手に移ることになる。ローマは地方の諸州では「ゲルウシア」のシステムを採用することを勧め、その証拠は小アジアの多くの場所の碑文に残されているという。キャンベルは、二つのことに注目する。第一は、この「ゲルウシア」が「長老たちの協働的団体 (συστήμα) あるいは、協議会 (συνέδριον) と呼ばれることができたこと」、そして、「この制度はパウロの諸教会が発展した世界、小アジアのエフェソ、スミルナ、フィラデルフィアの、まさにその部分で特に知られていたこと³⁶⁾」である。

これまで「ゲロンテス」、「ゲルウシア」について論述したが、「プレズビュテロイ」が唯一、職務として登場するのは、プトレマイオスとローマ時代のパピルスにおいてであり、そこでは、エジプトにおける地方的権威筋と村の役人たちを意味している。

4-2 グレコ・ローマン世界における「長老たち」の含意

プルタルコス (50~120年) の文書がこの主題にとって特に良い資料であるとキャンベルは主張する。それはキリスト教会の誕生期と重なるからである。まず、「プレズビュテロイ」は「古い時代の人々」、「古代人」あるいは「われらの父祖たち」を意味している³⁷⁾。同じ使用法は、フィロンにも見られる³⁸⁾。これは新約聖書ヘブライ書11：2の「『昔の人たち』は、この信仰のゆえに神に認

36 Campbell. op. cit., 74.

37 Plutarch, *Moralia*, 437F.

38 Philo, *De Post Caini*, 181.4.

められました」と同じ用法である。しかし、プルタルコスにおいては「プレズビュテロイ」は物語時代に生きていた人々のことであり、「年長の市民たち」を指している。場合によっては、この語は、「非戦闘員」であり、通常、暗黙裡に、あるいは、明白に力点は、彼らが年寄りであり、賢く、尊敬の価値ある人々であることである³⁹。

そのような者たちとして、むろん、プルタルコスの物語において、「長老たち」は協議会 (βουλή あるいは、ローマの諸物語における Senete 元老院) のメンバーとしても登場する。しかし、キャンベルによれば、ギリシヤのポリスの長老たちが彼らの影響力を行使したのは「集会」としてであって、彼らは「長老たち」として、「役人たち」でも「官僚たち」でもなかったのである。役人たちは、まさに ἀρχηγοὺς と呼ばれ、πρεσβύτεροι から区別されていたと主張している⁴⁰。ある意味では、ある役務についていて退職した者たちが「長老」と呼ばれたのかも知れない。

4-3 グレコ・ローマン世界における年老いた人々の地位

以上の記述からしてグレコ・ローマン社会において年老いた人々は、ユダヤ教の世界でそうであったように、尊敬されていたと考えるのが普通であろう。しかし、G.マイヨールは、古代近東から16世紀欧州に至るまで、ギリシヤ世界の老人の多くは、「悲しき老年」であったと主張している⁴¹。しかし、キャンベルは、ギリシヤ人が一つのある経験として老いた人々を好まなかったとしても、彼らが老いた人々を嫌っていたことを意味してはおらず、状況によって評価は、曖昧であると言う。第二に、確かに、ギリシヤの作家はしばしば年を取ることを嘆いてはいるが、彼らはまた年齢を重ねた人々を尊敬もしていたと言う。これ以上詳論すると主題から外れるので、キャンベルの結論を以下に要約して、記しておこう。

グレコ・ローマン世界では、ユダヤ教世界と同様に、古代から、「長老たち」

39 Pyrrh 27.71; 13.2.7. Nic 9.4.2.; Ages 10.6.3.

40 Campbell, op. cit., 78.

41 Campbell, op. cit., 80 に引用されている。G. Minois, Old Age, pp.43-76.

が地方の首長としてある顕著な役割を演じている貴族政治的な行政機関を知っていた。その指導者たちは、彼らの社会的地位を彼らの家族の力に負っていた。彼らはあまり、οἱ πρεσβύτεροιと呼ばれていない。なぜなら、支配的な職務としては、οἱ γέροντεςあるいは ἡ γερονσίαという呼称があったからである。この点で、ギリシヤの使用法はユダヤのそれとは異なっている。「οἱ πρεσβύτεροιは、むしろ、尊敬が本能的に払われるべきであると感じられた人のある階級を意味していたのであり、国家あるいは町の指導者たちではなく、家族、氏族、あるいは知り合い内部における *それ自身の長老たち*なのである」。比較人類学者たちは、年寄りの尊敬は、ほとんどの人間社会においては典型的なものであるが、「この尊敬は、生活標準の向上、増大する読み書き能力、社会的流動性、都市化そして『近代化』と呼ばれうる全プロセスにおいて浸食される傾向にある。われわれは、それゆえ、古代世界においては年取った者への高い尊敬を見出すことを期待するであろうが、この尊敬への傾向は増大する都市化によって挑戦される」⁴²。近代世界における比較社会学の知見は、また、この尊敬の浸食は、人々が強い所属意識を保持している拡大家族に生きるところではどこでも抑止されることを示している⁴³。キャンベルによれば、典型的なグレコ・ローマンの家制度は拡大家族であり、そのような諸家族内部において年長者たちはかなりの尊敬を享受していたと考えるべきであり、「最初期のキリスト教が広まったのはこのような世界であった」と結論づける。

さて、いよいよ、古代イスラエルと後期ユダヤ教の伝統とヘレニズム社会の伝統を踏まえて、新約聖書における「長老」についての本来の主題に入ることにしよう。

42 Campbell, op. cit., 96.

43 Ibid.

5. イエスの宣教における「長老たちの言い伝え」

(παράδοσις τῶν ρησβυτέρων)

マルコ福音書7章3節と5節において、イエスは「神の掟」を「昔の人の言い伝え」(文字通りには「長老たちの伝承」と比較している。それは、「人間たちの言い伝え」(8節)あるいは「あなたがたの言い伝え」(9節 新共同訳では「自分の言い伝え」)とも言い換えられている。イエスご自身、モーセの律法を変更し(マルコ10:1~12)、あるいは、自由に伝承を用いることができた(マタイ12:11)。それゆえ、マルコ7章では、イエスがサドカイ派に組して、ファリサイ派の「トーラー」の拡大に異議を差し挟んでいるわけではないであろう⁴⁴。しかし、イエスにおいては、「神の掟」は伝承に対して優先権を持っていることは明らかである。マタイ23章において、イエスは律法学者とファリサイ派の人々を批判し、彼らの偽善が、愛の律法を儀礼的事柄に従属させていることを指摘している。

さて、マルコ7章の「長老たちの言い伝え」であるが、ここでは「長老たち」が積極的・肯定的な意味で用いられていないことは明白である。新共同訳は「プレズビュテロイ」を「昔の人」と翻訳し、「岩波訳」は「父祖たち」と翻訳しているが、ここでは、単なる「年長者たち」ではなく、「伝承の担い手」であるから、ローデのように明白に断定できないが、ファリサイ派の律法学者への批判は込められていると見るべきであろう。

6. 最初期キリスト教時代と最初期キリスト教会における「長老たち」

「プレズビュテロス」は、パウロ書簡を除いて、新約聖書のすべての文書に登場し、その総計は65回である⁴⁵。共観福音書に24回、ヨハネ福音書1回、使

44 J. Rohdeは「ここでは、モーセのトーラーを紀元前数世紀の間決疑論的に形成し続けた、ファリサイ派の律法学者(神学的父祖)のことが考えられている(マタ15:2, マコ7:3, 5)」と言っている。『新約聖書釈義辞典Ⅲ』182頁。

45 A. D. Clarke, op. cit., によれば66回であるが(56頁)、その違いはここでは論じない。

徒言行録17回、牧会書簡5回、ヘブライ書1回、公同書簡5回、黙示録12回である⁴⁶。また、彼らの集団を意味する「プレズビュテロン」は新約聖書に3回、その内ルカ文書に2回、牧会書簡に1回生じる。この頻度統計から、パウロ書簡とヨハネ福音書におけるこの用語の欠落あるいは1回のみ使用が目立ち⁴⁷、また、ルカ文書における多用、及び、牧会書簡・公同書簡に登場することが、その特徴として際立っている。また、ユダヤ教的伝統の黙示文学という性格上か、ヨハネ黙示録にもかなりの頻度で登場する。また、「長老会」を現す「プレズビュテロン」は3回しか登場しないことも注意しておく必要がある。「長老」が決して個人ではなく、必ず、「長老会」のメンバーとして行動すると主張されることが多いからである。クラークは、「プレズビュテロイ」は「プレズビュテリオン」（長老会）と同義語であり、多くが、複数形で用いられているというが、同義語であるかどうかは別として、単数形は5回だけであるという指摘は興味深い⁴⁸。

総論として、ローデは三つの主要な語義と、その他、副次的な語義を区別せねばならないと言い、主要な三つの語義とは、1) エルサレムのサンヒドリンの信徒議員など、2) キリスト教会の長老たち、そして、3) ヨハネ黙示録の「長老たち」であると言う。

イエスによる「長老たち」についてはすでに言及したので、以上の展望をもって三つの語義を記述する。

46 J. Rohde 『新約聖書釈義辞典Ⅲ』182頁。

47 A. D. Clarke, *A Pauline Theology of Church Leadership*, 52. 「『長老』という用語は監督のそれと密接に関係づけられているが、この両者は牧会書簡に3度生じるのみである」。

48 いわゆる「放蕩息子の譬」で「長男」（ルカ15:25）、「ヨハネの手紙」ⅡとⅢの著者として、あとは、Ⅰテモテ5:1, 19である。Clarke, *op. cit.*, 56. この複数形での用法は「単に、一つの共同体が常に複数の長老たちを有していたということだけでなく、さらに、一人の長老が、長老としての責任、仕事あるいは義務を長老たちの結合された会合あるいは集会の内部から離れて持っていないことを意味している。…長老たちの権威は集会的に行使された。結果的に、「長老であること」は個人的な職務ではなく、それによって、影響力のある尊敬された団体の会員性を持つ、榮譽を与えられた地位なのである」。

6-1 共観福音書における「長老」

エルサレムのサンヒドリンは70名から構成され、大祭司が議長を務めていたが、祭司24名、長老24名、そして学者22名からなっていた⁴⁹。ユダヤ当局の中核であった、そのような「長老たち」は当然、イエスの受難物語との関係で一つの役割を果たしている。彼らは民の代表として基本的に裕福な名望家の出身で、神学的には、サドカイ派的な思想の持ち主であった祭司貴族に依存していた⁵⁰。

マタイ21：23には、「イエスが神殿の境内に入って教えられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て」権威問答をしにかけている。また、16：21では、「長老」、「祭司長」と並んで、「律法学者」が並列され、彼らから苦しみを受け、殺されることが予告されている。その予告の成就としてマタイ27：41は「同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱」と報告している。マルコの平行記事では、「長老たち」の記述はない。ルカ23：35では「議員たち」がイエスを罵っている。しかし、マルコにおいても、イエスを逮捕する際には、「祭司長、律法学者、長老たち」(14：43) が言及され、また、この三者は当然、最高法院の相談に参加している。(15：1)。基本的に、このような「長老たち」の記述は、ユダヤ教後期の伝統と性格づけ、特にエルサレムのサンヒドリンのそれと変わりはない。

ルカ7：3には、カファルナウムのローマ軍の百人隊長が、自分の部下を癒して欲しいとイエスに取次ぎを願い出たのが「長老たち」であったが、この事例はむしろ、ディアスポラの会堂に集う長老たち、あるいは地方の地域共同体において尊敬をもって呼ばれていた「長老たち」(elders)に近いのであろう。

ヘブライ書11：2における「長老たち」もサンヒドリンの長老たちというより、信仰の父祖たちであり、『新共同訳』は「昔の人たち」、『岩波訳』は「先立つ世代」と翻訳している。ここでも、英語で表現すれば、presbyterではなく、elderであろう。先のマルコ7章の事例と似ている。こうして、共観福音書ではサンヒドリンの構成員の「長老たち」と「年長者たち」、あるいは、シナゴグの代表としての「長老たち」の二種類あるいは三種類が登場している。

49 『キリスト教大事典』(教文館)、1966年 改訂新版458頁参照。

50 J. Rohde『新約聖書釈義辞典Ⅲ』182頁

6-2 最初期キリスト教時代の教会周辺の「長老たち」

使徒言行録4：5において、イエスの受難に関わった「長老たち」は使徒たちの迫害にも加わっている。「次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった」。彼らはステファノを捕らえるときも参加している。(6：12)。23：14では、パウロの殺害を計画した四十人が、祭司長と長老たちに助勢を求めており、25：15では、祭司長と長老たちは総督フェストゥスにパウロを罪に定めるように求めている。

こうして、新しい教会の周辺におけるユダヤ人の「長老たち」は、一貫してイエスの教会に敵対している。

6-3 キリスト教会の「長老たち」

本来はここで、項目を新たにすべきかも知れない。この論文の主要テーマである新約聖書時代における教会の「長老たち」を論じるからである。

最初期のキリスト教会の様子は、パウロ書簡や福音書伝承の背後にある「生活の座」からの推論なども可能ではあるが、その情報は使徒言行録に頼らざるを得ない。そして、パウロ書簡における教会に関する情報も、使徒言行録が記述するパウロの異邦人伝道の枠組みで考えざるをえないのである。そして、ルカの独特の神学的視点と歴史的叙述の枠組みはかなり特殊であるので、その情報の歴史的信頼性については論争的なのである⁵¹。このような限界を心に留めながら、ルカが語る教会の「長老たち」を考えてみよう。

51 Campbell, *op. cit.*, 141. 使徒言行録の著者はその文書自身がルカ福音書と同じ著者であると語るが(1：-1~4)、パウロの同伴者とされるルカとパウロとは大きな神学的差異がある。まず、キリスト論であるが、ルカはイエスを復活によってみ子へと挙げられた人であるという前パウロ的伝統に立ち、パウロが受け入れたようなイエスの十字架での「贖い」を告白していない。また、アレオパゴスの説教ではいわゆる自然神学をパウロに語らせているが、パウロがそのように語ったとは思えない。また、使徒言行録の描くパウロは律法に忠実であり、「律法からの自由」(ローマ10：4で新共同訳は「律法の目標」と翻訳するが、「律法の終わり」が適切である)というパウロの徹底性を欠いている。さらに、悪意があるわけではないかも知れないが、パウロは自分を「使徒」としているが、使徒言行録はこれを認めていない。また、パウロにとって重要な福音の終末論的理解と再臨待望は使徒言行録ではほとんど後退している。たとえ使徒言行録の著者がルカはないとしても、「われわれ」資料の核に、パウロの同行者の目撃証言があることまで疑う必要はないであろう。使徒言行録の執筆年代は、70年代以前、80年代前後、そして、第一世紀の終わりあるいはそれ以後と大きく分けて3つの説があるが、荒井献は、著者はルカ福音書と同一人物の無名の異邦人キリスト者で、90年代の成立と考えている(『岩波新約聖書』919頁。)松見は80年代前後と考える。

6-3-1 エルサレム教会の「長老たち」

エルサレム教会は、いわゆる二階座敷の家の集会（通常、そのような二階のある家は大きな家であり、12名かそれ以上の人々が祈りや礼拝のために集まることができた）を中心に幾つかの家の集会から成っており、120名ほどの会員であったと思われる⁵²。キャンベルは、「最初期のキリスト者たちが家庭で集会を持っていたとすると、彼らはまた家レベルでの指導者たち、つまり、家構造それ自体によって提供された指導者たちを有していた⁵³。」と推測している。裕福な女性ドルカスも二階のある家屋を有していたが、E.S.フィorenzoは、家を実際、管理していたのは女性たちであり、女性の指導者も多かったであろうことを指摘している⁵⁴。使徒言行録はそのような家の教会の指導者たちをどのように呼称しているかを語っていない。

しかし、上述したように、ユダヤ教の長老たちはイエスと原始教会に敵対していたにもかかわらず、「長老たち」の存在はルカが記述するエルサレムの原始キリスト教会にも見られるのである。ルカは使徒言行録11:30において、アンティオケア教会が、エルサレム教会あるいはユダヤ人キリスト者のための支援金を集め、これを「バルナバとサウロに託して長老たちに届けた」と報告している⁵⁵。これは、エルサレム教会の使徒たちと共にいたユダヤ人キリスト者の「長老たち」である。

使徒言行録15:2以下においても長老たちが言及されている。ここはエルサレム会議の出来事の記述であるが、この会議には「使徒や長老たち」が代議員として参加していた。21:18では、エルサレム教会のヤコブを尋ねたパウロ一行は「長老たち」に挨拶をしている。この箇所はいわゆる「われわれ」資料で

52 Campbell, op. cit., 151ff. H-J Klauck, *Hausgemeinde und Hauskirche im fruhen Christentum* SBS 103, Stuttgart/Verlag Katholisches Bibelwerk, 1981. 48-51, W. Rordorf, 'Was wissen wir ueber die christlichen Gottesdienstraume der vorkonstantinischen Zeit?' in: ZNW, 65, 1964, 110-28. Quoted by Campbell, op. cit., 151.

53 Campbell, op. cit., 153.

54 E.S. Fiorenza, *In Memory of Her*. London/SCM, 1983, 177.

55 Campbell, op. cit., 159.

ある。もし、彼らがユダヤ人シナゴグの協議会のように会衆を代表しているとしたら、15章の使徒会議においては、サンヒドリンのような機能を果たしていたのかも知れないとボルンカムは解釈している⁵⁶。このような理解の背後には、最初期のエルサレム教会の指導者たちは12使徒であったが、それから10年から15年後には、使徒たちが福音宣教に旅立って不在になったのか、あるいは、イエスの兄弟ヤコブがペトロに取って替わることによって、ユダヤ教のシナゴグの伝統が取り入れられ、「長老」が一つの教職 (an office of elder) として成立し、それがやがて、使徒時代と使徒後時代の文書に見られる「長老制」へと発展したという前提があると言える。むろん、ローデは、ここでは、「指導的役割は使徒にある (演説者はペトロ)」と言い、「長老たち」は、あくまでも「使徒たち」の後に述べられていることを強調している。しかし、このような秩序は、主要使徒たちがエルサレムを去り、イエスの兄弟ヤコブが指導権を握ると、使徒たちの役割は後退した。現に、使徒言行録16:4以降、使徒への言及がなくなっていることを根拠にして⁵⁷、ローデは、「ルカは長老を主の兄弟ヤコブと共に、原始教会の新しい指導部として、また、全教会に対する一種の意志決定委員会として、頂点にいるものと想定している (21:18)。⁵⁸」と言う。

しかし、キャンベルは、彼のユダヤ教社会、グレコ・ローマン社会における長老に関する研究において、『長老たち』はその共同体において大きな榮譽を持つ人々のための集合的称号としてあるのであって、彼らの間には、種々の役職保持者たちが含まれてはいるが、その結果、『長老たち』はそのような明確な役職保持者たちを指す用語と比較された、明確ではなく、無限定な (imprecise) 用語である⁵⁹。」と主張する。そしてそれを根拠に、「長老たち」は、教会の役

56 Bornkamm, op. cit., 663.

57 Rohde, 前掲 183 頁。

58 ローデ, 前掲項目 183 頁。ボルンカムの表現でいえば、長老団の形成は、部分的にはシナゴグのパターンに、そして、部分的にはサンヘドリンのパターンに従っているという。663 頁。ローデはまた、使徒言行録のヘレニズム教会の読者によって「長老たち」はヘレニズム諸都市のゲルシア (長老会) に当たるのであろうと述べている。(182 頁)

59 Campbell, op. cit., 160.

職ではなく、家の教会の代表者たちであったと結論づけている。使徒言行録11:30で献金を受け取ったのも、使徒たちの下位の役職者たちではなく、まさに家の集会を代表する指導者たちであり、同様に、21:18もまた、そこにいた指導者すべてを強調しているのであって、エルサレム会議においても、「使徒たちと長老たち」は、この歴史的決定が、教会の全指導力によって、つまり、12使徒と家ごとの (κατ' οἶκον) 集会を導く人々によって決定されたことを意味していると解釈する⁶⁰。

6-3-2 異邦人教会における「長老たち」

使徒言行録13:1には、「アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。」と言われていることから、アンティオキア教会はエルサレム教会の秩序とは異なり、「預言者と教師たち」(Iコリント12:28, エフェソ4:11のように)によって指導された教会であると主張される⁶¹。使徒言行録の著者が霊の運動や預言者に興味があることは確かではあるが、エルサレム教会とアンティオキア、伝統的秩序と霊の自由を鋭く二者択一的に考える必要はないであろう。

事実、使徒言行録が描く異邦人教会においても「長老たち」が登場する。使徒言行録14:23によれば、パウロとバルナバは「弟子たちのため教会ごとに」(κατ' ἐκκλησίαν)長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信じる主に任せた」と語られている⁶²。これが事実であれば各個の「家の教会(集会)」にその代表である長老(パウロがエписκοποιと呼んだものと似ていると言って良いかも知れない)がいたことになる。

60 Campbell, op. cit., 163.

61 B. H. Streeter, *The Primitive Church*. London/Macmillan, 1929, 75; J. Roloff, *Apostelgeschichte*, Goettingen/Vandenhoeck & Ruprecht, 1981, 193, quoted by Campbell, 164.

62 13:1の κατὰ τὴν οἶκον ἐκκλησίανを参照。最初に人々は家ごとに集まっていたが、13:1では、アンティオキア市にあり、家の集会毎に集っていた信徒たちを「教会」として集合的に呼びかけていると理解できよう。

また、20：17では、「パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たち（πρεσβύτεροι τῆς ἐκκλησίας）を呼び寄せた」と語られている。教会は単数形であり、長老は複数形であることから、C. K. バレットは使徒言行録はここで世界的な「普遍的教会」をイメージしていると解釈する⁶³。しかし、この文脈でそれはありそうもないことである。使徒言行録では「エクレシア」という用語において、ある都市の地方教会、それは幾つかの家の集会から成っていたのであるが、に言及していると理解できる。そこで、むしろ、ここでは、「神の教会」（28節）という言葉がパウロ的用語であり、「キリストの血」と関連して用いられており、ここにパウロが実際に用いた用語が反映しているか、あるいは、パウロの教会観を保持しようとしている著者の想いが反映していると解釈すべきであろう⁶⁴。

さらに、そこでは、「長老会」が教会の指導者層を形成しており、それが、「監督者」と言い換えられ、牧会的機能が委託されているように見える。しかし、ローデは、ここでは、サンヘドリの機能と言うよりも、あのルカ7：3の「シナゴグ共同体の長老と類比している」と理解している。つまり、ここでも、出来上がった役職としての「長老会」を想定するより、開拓伝道数年後のエフェソ教会には、フィリピ1：1のように、各々の家の集会の指導者である「監督たち」あるいは「長老たち」が何人もおり、一つの教会を形成していたと考えるべきであろう。

6-4 牧会書簡と公同書簡における「長老たち」

パウロは自身の手紙において「長老」に一切言及していない。それは、ユダヤ教の伝統、あるいは、イエスと原始教会とを迫害した「長老たち」への反動であったのだろうか。彼はまさに、「年齢」を根拠とする自然の伝統にはなく、自由な、カリスマ的な指導者像を持っていたのであろうか。

63 C. K. Barrett, 'Paul's Address to the Ephesian Elders,' in: *God's Christ and his People*. J. Jervell and W. A. Meeks(ed.), Oslo/Universitetsforlaget, 1977, 114. Quoted by Campbell, 171.

64 Campbell, op. cit., 172.

しかし、牧会書簡⁶⁵と公同書簡においては、ルカが描いたような「長老たち」が登場する。すると、パウロとは別に、ルカの教会秩序の線の発展があったと考えるべきか、パウロの教会も「長老たち」は存在していたが、たまたま「長老たち」と言う呼称を用いていないだけであり、当然、パウロからルカへ、そして、牧会書簡・公同書簡へという発展があったと考えるべきであろうか。

牧会書簡には教会における指導者たちとして、「長老たち」が3回、「監督」が2回、そして、執事が1回登場する。

テトス1：5～9の文脈には、使徒14：23のように、クレタの教会にも、使徒の委託により、使徒の弟子たちによって、町ごとに(κατὰ πόλιν)「長老たち」が任命されている。しかし、ここでも、使徒言行録20章17節以下のように、話題が「長老たち」から不意に「監督」(単数)に移っている。(テトス1：7では「監督」は単数形であるが、使徒言行録20：28では「監督者」は複数形である)そして、監督の資質としてあるべきでないものが5つ、持つべき資質が6つ挙げられている。ここでは、「長老たち」と「監督」はどのような関係にあったのだろうか。両者に関する資格づけにおいては、「非難される点がなく」が共通しており、「長老たち」と「監督」はほぼ同じ職務を指しているとも解釈されうる。クラークは、6から7節の移行において、「幾分子期されぬ原因を示す連結語」(the somewhat unexpected causal connective) γάρ (for/since/because) が用いられており、Iテモテ3：2において監督(長老ではない)を記述しているものとほぼ同一の語り口⁶⁶であると言い、5～7節は一つの短縮形として「わたしがあなたに指示したように、もしある人たちが非難のない者であり、一人の妻の夫であり、信仰ある子どもらを持っているなら、あらゆる町で長老たちを任命すべきです。なぜなら、監督は非難のない者であらねばならないか

65 牧会書簡がパウロの真正書簡ではない理由としては、言葉のスタイルと語彙の違い、神学的、歴史的、教会論的相違が挙げられる。牧会書簡はすでにパウロが死亡したか、そばに存在していないことを前提していることは書簡自体から明白である。保坂高殿は、殉教論的用語法の欠如と教父証言を考慮し、100年前後に成立したと推定するが(『岩波新約聖書』932頁)、キャンベルは、ユダヤ教の律法主義が対話の相手であり、パウロによる福音理解が論争中であることから、コロサイ書、エフェソ書の背景と似ており、70年代くらいを想定している。高坂はコロサイ書を70年代頃、エフェソ書を80-90年代とする。

66 Clarke, op. cit., 55.

らです⁶⁷」と翻訳可能であると主張している。すると、「長老」と「監督」はほぼ同義語となる⁶⁸。

I テモテ 3 : 1 ~ 8 では、8 節以下の「執事」への言及に先立って、「監督の職を求める人がいれば、その人は良い仕事を望んでいる」と言われており、「長老たち」は言及されていない。ところが、I テモテ 5 : 17 には、「監督」ではなく、「長老」という呼称が用いられ、「良く指導している長老たちは、特に御言葉と教えのために苦勞している長老たちは二倍の報酬を受けるにふさわしい」と言われている⁶⁹。また、「長老に反対する訴え」は性急な断罪から護られるべきことが命じられている⁷⁰。(19 節) ここでは、「良く指導している長老」(οἱ καλῶς ρηοσεῶντες πρεσβύτεροι) は、すべての長老たちに言及しているのか (elders) ? あるいは、長老たちのある集団 (elders who rule, or elders who rule well) であるのか? 説教と教育に勞苦する人々 (elders who preach and teach) は、長老たちのさらなる部分集合 (further subset) なのか? 「指導している人」と同格であるのか? 長老たちがいずれかの場合にもせよ、それは「監督」と同じ人なのか? もし、彼らが支払われるべき「榮譽」が経済的なことであるとしたら、二倍とは「報酬額」のことであるのか? など積義的に難しい問題がある⁷¹。

67 Ibid.

68 理由は述べていないが、ローデはテトス 1 : 7 の「監督」は「長老たち」は互換的ではないと言う。(183 頁)

69 F. Hahn, *Theologie des Neuen Testaments*, Tuebingen/J. C. B. Mohr, 2002. (大貫隆・大友陽子訳) 日本キリスト教団出版局, 2006 年『新約聖書神学 I』475-7 頁で、その報酬は「決して高くはなかったであろう。それは、おそらく、すでに副次的な働き、あるいは専任職としての働きであったろう」と言う。また、総じて「指導する」ことが長老の役割の標準的な表現と看做されたことが確認できると解釈している。

70 Clarke はここでは「長老」が単数形であり、5 回の内の 1 回の特殊な例であるので、この長老は、年老いた人がある悪行で非難されていると解釈している。(57 頁)

71 Campbell, op. cit., 182. NRSV は「Let the elders who rule well be considered worthy of double honor, especially those who labor in preaching and teaching;」と翻訳し、KJV は「Let the elders that rule well be counted worthy of double honor, especially they who labor in the word and doctrine.」と翻訳している。NRSV では良く指導する長老たちがおり、その人たちは二倍の榮譽を与えられるべき長老たちがおり、その中でも説教と教育に携わる長老たちは特別である」ということになり、KJV では、良く指導している長老たちは二倍の榮譽に値する者たちであり、特に、説教と教理教育に当たる者たちはそうであるということになる。

「良く指導している」ことの内容が「御言葉と教え」であるのか、「指導性」と並んで「宣教」と「教育」の働きがあるのかは判然としない⁷²。ともかく、ここである「長老たち」には、「御言葉と教え」の職務が与えられ、ある種の報酬が支払われていることが想定されているように見える。つまり、二倍の報酬とは「榮譽」と金銭的なサポートという意味である⁷³。

クラークは以下のように解釈する。

このような長老制内部における外見上の差異は解釈者たちに（複雑な）問題があること明らかにしてきた。彼らの仕事を旨くやる長老たちには報酬を与えるという事はありそうにない。もっと直截な解釈は、あらゆる長老が家の教会を指図し/指導し/管理するわけではなく、そうすべき人々はこの仕事のため報酬を与えられるというものである。この節と一貫しているのは、長老たちを、ある結合された集団として決定をしながら共に行為する者たち、指導という付加的な、特別の、個人的役割を果たすある制限された数の人々として理解することである。そして彼らはまた教師たちでもある。われわれが見てきた2つのスキルセット [指導し、世話することと、宣教し、教えること] は、監督たちに要求されるが、それらは長老の本質的資格ではないという理解である。しかし、この重複のゆえに、「長老たち」と「監督たち」が同義語であると推論することは正しくないだろう。あらゆる長老たちが教え、説教し、あるいは家の教会を管理することを要求されていない一方で、これらの義務は監督の職務には本質的なのである。

72 Clarke, 57. 「I テモテ 5:17 は、長老たちの幾人かがまた、指図すること/導くこと/管理することに巻き込まれるであろうことを示しており、そして、これを旨くやることで二重の榮譽に値すると言われている」と言い、『ヘルマスの牧者』Vis.2.4.3を参照することを勧めている。そこには「教会を主宰する長老たちと共に」という表現があり、「プロイステイミ」が共通して用いられており、また、I ペトロ 5:2の異読に、「監督することを通して、あなたがたの間で、神の群れを牧しなさい」とあると指摘している。

73 Campbell, op. cit., 202-3.

監督ではないそれらの長老たちはただ彼らの仲間の長老たちと一致して会議の中でのみ行為する。監督の職務は、区別されて、その関連された義務と付加的資格付（教えること、神の教会を世話すること）を伴い、長老たちの集団の間から引き抜かれ特別の個人にたぶん与えられたのであり、彼らは自分自身の家の教会を持ち、それを彼らが導き、教えてもいたのである。この再構築、つまり、それにおいては、監督たちでもあったそれらの長老たちは、指導すること、教えることそして牧会そして広く見渡すことに当たっているという見方は、テトス1：7の命令とIテモテ5：17の記述と一貫している⁷⁴。

しかし、キャンベルは、「牧会書簡の関心の一つは、長老たちを確立することではなく、単一の監督の導入なのである⁷⁵」と主張している。つまり、教会員の人数が多くなり、家の教会（集会）の「長老たち」「監督たち」の中から、その町の「監督」（単数形）を選ぶような状況に対応しているのである⁷⁶。そして、長老たちの中から一人の監督を選立する際の基準が、彼自身の家の教会の良き指導者であるかどうかに見られているのである。現代人の感覚で「自分の家庭を治めることを知らない者に、どうして神の教会の世話ができるでしょうか」（3：5）という問いは「核家族」の管理をイメージしがちであるが、ここでは、自分の家を教会の集会に提供している「拡大家族」的家の教会の管理を意味していることになる⁷⁷。その家は「客を親切にもてなす（「フィロクセノス」）ために十分な部屋のある家族なのである。そして、そのためには、「金銭に執着せず」（「アフイラルグロス」）、また、群れを養う羊飼として「良く教える」（「ディダクティコス」）ことができねばならないのである。それは、まさにテトス1：9ある「教えに適う信頼すべき言葉をしっかりと守る人でなければなりません。そうでないと、健全な教えに従って勧めたり、反対者の主張を論破

74 Clarke, *op. cit.*, 58.

75 Campbell, *op. cit.*, 174.

76 *Ibid.* 198.

77 *Ibid.* 199.

したりすることもできないでしょう」と重なる事柄である。こうして、自分の家の集会を良く管理できる人が(「長老たち」でもあり「監督たち」でもある人の中から選ばれ)、今や、「神の教会」(5節)、「神の家」(I テモテ 3:15)、「大きな家」(II テモテ 2:20)を預かる「監督」(単数形)になるわけである。

I ペトロ 5:1 以下では、著者は「仲間の長老」(ὁ συμπρεσβύτερος)として他の「長老たち」に、教会の職務を適切に行うように勧めている⁷⁸。

また、ヤコブ 5:14では、「病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい」と勧められている。このような勧めの背後に「長老会」(「プレズビュテロン」)の存在が仄めかされているのかも知れない⁷⁹。

I テモテ 4:14には新約聖書に3回しか登場しない「長老会」(プレズビュテリオン)が用いられる珍しい箇所である。後の2回はルカによって用いられ、エルサレムのサンヒドリン(ルカ 22:66, 使徒 22:5)である。すると、テモテに按手をした「長老会」は、ある権威を帯びた「長老団」が想定されている可能性が大きい。

このような事例を含めて、ボルンカムは、牧会書簡と公同書簡における「長老たち」は監督たちとほぼ同じ働きであるように見えると解釈し⁸⁰、監督は常に単数形であり、長老たちは常に複数形である(テトス 1:5でも)という理由で、すでに、その時、「一人の指導的長老が、長老集団内部の管理的な機能を取る傾向が存在している。たぶん、後代の君主的な監督への(zum Monarchischen

78 ボルンカムは、ここでの「長老たち」は牧会的機能を持つ公的な職務の担い手であり、「卑しい利得のためではなく」という2節の言葉は彼らが有給であったことを示していると解釈している。しかし、キリストだけが「監督」と呼ばれ(2:25)、教会指導者の相対的位置づけがなされていると正当にも、指摘している。666頁。

79 ローデ、前掲 183頁。II、IIIヨハネの手紙の発信人が「長老」と呼ばれているが、ローデは「恐らく地域の長老会の構成員や議長ではなく、バピアスが述べているような、使徒的伝承の担い手、伝承者の尊称であろう(エウセビオス『教会史』III 39.3-4; Bornkamm, 前掲書 671; H von Campenhausen, Kirchl. Amt und geistliche Vollmacht in den ersten drei Jhh. 132, 177-8))と解釈し、「長老会」を想定しないが、ヤコブ書では「病人への奉仕」を務めとする「長老会」があった可能性を示唆している。

80 ローデはテトス 1:5の「長老たち」は1:7の「監督」とは互換的ではないと言う。

hintendierendete bischoefliche Amt) 発展の出発である」と主張している⁸¹。これは、キャンベルの考えとも一致しているが、キャンベルは、ボルンカムとは違い、直線的な後代への発展論を先取りしてはいない。結局、このことは、研究者たちが「牧会書簡を初期のパウロ的コンテキストにより近く考えるか、あるいは、イグナティオスのコンテキストにより近く考えるかで異なってくる」ことになり⁸²、単なる「長老たち」の語義を超えた視点が必要になってくる。あるいは研究者の教派的立場をいかにして聖書テキストに読み込むか、読み込まないかということになってしまう。

6-5 ヨハネ黙示録における「長老たち」

ヨハネの黙示録の「長老たち」は前述の「長老たち」とは明らかに違って(ローデの「長老たち」の3つの主要語義の3番目で) 天的存在である。4：4，5：6以下において二四名の長老たちが神の玉座を囲んでいる。彼らが、玉座の周りに座り、白い上着と冠で飾られていることは、彼らは神の協議会に参加はしているが、サンヒドリンと違い、司法的権限などはなく、神礼拝への奉仕者なのである。彼らは変容された聖徒たち(14：1以下)や玉座の周りの天使たちから区別され(5：11)、玉座に最も近くにいる存在である。私見によれば、この24という数字は、12部族と12使徒を足した数字であるようにも思えるが、ボルンカムは、1列王22：19、詩編89：7、ダニエル7：9～10、イザヤ24：23やバビロニアやペルシャの影響にも言及しており、そう簡単に釈義できそうもないようである。しかし、この論文の主旨とは全く異なった用例であるので、これ以上言及しない。

6-6 「年老いた者」としての「プレズビュテロス」

最後に、新約聖書の用例として単に「年老いた者」としての「プレズビュテロス」を挙げておこう。ルカ15：25のいわゆる「放蕩息子」の譬では、年長の「長男」を意味している。1テモテ5：1，2，では、単に「老人」、「年老い

81 667-668.

82 A. D. Clarke, *op. cit.*, 55.

た婦人」と翻訳され、使徒言行録2:17のヨエル書からの引用も、単的に、「老人たち」であって、高年齢を意味しているにすぎないであろう。ヨハネ福音書の唯一の例である8:9も「罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」との主イエスの厳しい問いかけに直面してその場を去った「年長者」である。あるいはこの箇所のテキストがない写本（西方で作成された写本のみ）、語彙の多くが非ヨハネ的であり、違う文脈に登場する写本もあるので（ルカなど）⁸³、ヨハネ福音書の「長老たち」の用例は皆無である可能性もある。

6-7 まとめ

新約聖書における「長老たち」は、1) サンヒドリンの信徒議員、2) キリスト教会の「長老たち」、そして、ヨハネの黙示録における「長老たち」の3つの主要な概念と、地方のシナゴグの代表者や単なる年長者を現す周辺的な概念とに区別できる。

ルカ文書に用いられる「長老たち」はイエスの受難物語に関わるエルサレムのサンヒドリの構成メンバーである。彼らはイエスに敵対しただけではなく、原始キリスト教会にも敵対し、祭司長、律法学者と共に圧力をかけた。

初期キリスト教会においても「長老たち」が存在した。パウロはこの用語を用いなかったが、ルカ文書の使徒言行録、牧会書簡と公同書簡に用いられている。「長老たち」は使徒たちと並ぶエルサレム教会の代表者たちであったが、使徒がエルサレムを去るに従い、ヤコブを中心とした教会の指導者体制となっていた。ここには最初期の、自由で、霊的な教会秩序からユダヤ教の組織形態への後退があったのかも知れない。しかし、「自由で、霊的なもの」と「ある種の秩序」を「あれか これか」で対立的に考えるのは、研究者自身の先行的の神学であるのかも知れない。

ルカによれば、異邦人教会においても「長老たち」が立てられた。彼らは各々の「家の集会」の代表であり、基本的に、み言葉によって異端者から「神の

83 「岩波訳新約聖書」333頁。

教会」を自己区別をしながら、信仰者の群れを牧会・監督することがその働きであった。

牧会書簡と公同書簡にも「長老たち」が存在していた。I テモテ 5 : 17では、「長老たち」の働き、あるいは「長老たちの」一部の「特別な長老たち」の働きは、「御言葉と教え」（あるいは指導すること/説教すること/教えること）であり、一定の給与が支払われていた痕跡がある（栄誉と報酬、二倍の栄誉の可能性もあるが）。I テモテ 4 : 14の記述の背後にはある権威を帯びた教会の指導者集団としての「長老会」が存在していたことが推測される。ヤコブ 5 : 14の背後には「病人たちの牧会」を担当する長老団があったことも推定される。ボルンカムは、「長老たち」と「監督」はほぼ同じ働きをしていたと解釈し、「監督」は単数形であり、「長老たち」は複数形であることから、後代の一人の監督の下の長老たちと執事たちの教会職制への発展の萌芽がすでに新約聖書の教会の中にあると理解する。しかし、ローデは、ルカが描く「長老たち」と「長老会」の働きは、サンヒドリンの働きというより、「シナゴグ共同体の長老たち」と類似していると言う。キャンベルは「長老たち」は役職 (office) ではなく、信徒たちの代表者たちであったと解釈している。最初期の教会では「家の集会」を主宰する「監督者たち」(フィリピ 1 : 1) が存在したが、家の集会增加すると、そのような信徒の代表者たちの中から各町の教会に一人の「監督」が選ばれるようになるが、それは、第7節で詳しく論じる必要がある。

ヨハネの黙示録の「長老たち」は特殊なもので、天の玉座の周りで神を礼拝・賛美する集団が「長老たち」である。

その他、単に「年長者」を意味する事例があり、地方の会堂の代表者であるような周遍的な用語としての「長老たち」への言及もないわけではない。

7. 真正パウロ書簡における「長老たち」の不在について

キャンベルは、真正パウロ書簡には「長老たち」の用語が欠如しているにもかかわらず、その著書において、97頁から140頁にわたり、44頁を費やして「パウロと長老たち」の関係理解を展開している。パウロ書簡に「長老たち」の用

語が欠如しているとしても最初期の教会と教会秩序⁸⁴については、パウロ抜きには語ることができないからである。

むろん、キリスト教会の形成は、パウロ自身によって始まったわけではない。最初期のパウロ書簡である I テサロニケは50年頃の執筆、I コリントが53年～55年頃と推定されるから⁸⁵、エルサレムにおける原始教会が誕生してから20年近く経過していることになる。使徒言行録の記述が正しければ⁸⁶、キリスト教信仰は少なくとも、サマリア (使徒 8 : 4～25)、ダマスコ (9 : 2)、フェニキア、キプロス、アンティオキア (11 : 19) に伝えられ、教会が存在していた。ただその情報がないので、それらの教会は歴史的に沈黙しているのである。パウロはかつて教会の迫害者であったが、回心をし、アンティオキア教会の会員となり、その後、主要な指導者ではないにせよ、指導者としての頭角を現し、最終的にはアンティオキア教会から任命された福音宣教師・代表者であった⁸⁷。

ところが、ここに問題が生じる。つまり、この間の諸教会の状況やパウロが設立した異邦人諸教会の情報についてわれわれは使徒言行録を通して知るわけであるが、ルカは好んで教会の「長老たち」に言及し、使徒言行録によれば、パウロ自身が諸教会に「長老たち」を立てることを命じたにもかかわらず、パウロの真正書簡には「長老たち」が登場しないのである。ただフィリピ 1 : 1 に「すべての聖徒たち、ならびに監督たちと奉仕者たち (執事たち)」が言及

84 E.シュヴァイツァー『新約聖書における教会像』(佐竹明訳) 新教出版社 1968年の原題は *Gemeinde und Gemeindeordnung im Neuen Testament* であり、本来は「新約聖書における教会と教会秩序」あるいは「教会職制」と翻訳すべきである。

85 『岩波新約聖書』920～921頁参照。

86 教理に関する神学的立場が問題となっているわけではないので、歴史的な信憑性はあろう。

87 ルカはパウロを「使徒」として認定していないが、パウロ自身は「使徒」であることを自任している。(ガラテア 1 : 1) イエス時代にこの用語が使われたとすれば、教会の権威という以上に、宣教に「派遣された者」を意味しており、パウロの用法が正しいことになる。しかし、パウロはイエスの復活とイエスの生との歴史的連続性をアンティオキア教会を通じて確保したし、彼の「募金活動」を通して、異邦人教会とエルサレム教会との結びつきを重要視した。それが異邦人教会の存立の正当性(正統性)の一つの根拠であったと思われる。

されるのみだからである。あるいは、使徒、預言者について「教師」が言及されるのみであり（Ⅰコリント12：28）、ローマ12：6以下では、「預言の賜物」、「奉仕の賜物」、「教える人」、「勧める人」、「施しをする人」、「指導する人」が登場するのみである。（むろん、最後の引用箇所は「賜物」（Χρίσματα）について語っており、「長老たち」の存在はカリスマタの一つではないのは当然である）そうであるとすれば、パウロの教会においては、第一に、「長老たち」が存在したが、たまたま言及していないか、あるいは、「監督たち」と「長老たち」は交換可能な用語であり、同じ職務の別の呼称であるのか⁸⁸、あるいは、第二に、パウロの教会には「監督たち」と「執事たち」だけが存在したのか、いずれかの解釈が可能性として成立する。この場合、「長老たち」は信仰共同体における尊敬された年寄りたちの集団となる⁸⁹。あるいは、第三に、二つの異なった教会制度のモデル、つまり、「監督と執事」の家の教會的モデルと「長老たち」と「長老会」を持つユダヤ・キリスト教的シナゴグモデルという二つが混合して存在していたのか⁹⁰、そして、第四に、牧会書簡の中に、後述のイグナティオスにおけるような単一監督制を読み込む理解である。それはどこか、使徒言行録の「長老たち」「監督たち」→パウロの教会にも「長老たち」は存在したが、たまたま言及されていないだけ →「長老会」のトップあるいは誰かが「監督」に立てられるという一直線の発展論を前提している⁹¹。この

88 この解釈の困難さは、「牧会書簡では、監督が一貫して、単数形で用いられていること、そしてテトス1：7では、『長老たち』は複数形で、すぐに、単数形の『監督』が言及されることである」。(Clarke, *op. cit.*, 53, note51.

89 Ⅰテモテ5：1～2で、「年寄いた男女」が登場する。

90 ハーンは『新約聖書神学Ⅰ』5.2.1において、「歴史的に言えば、長老制と『監督と奉仕者』の体制の二つが相互に融合していたことから出発しなければならないであろう。しかし、その際、何人か複数の人ではなく、一個人が「監督」として任命され、明らかに「同等者の中の第一人者（*primus inter pares*）」として、長老団に属していたのである」と言う。邦訳475頁。B. Holmbergも「長老的」秩序と「監督的」秩序のこの合金融合は、ルカ（使徒20）におけるように、痛みのないプロセスであった。牧会書簡とⅠクレメンヌもすべてそれを当然の事柄として、そしてその起源を使徒たちの時代にあると考えている、と言う。194頁。Campbell, *op. cit.*, 98に引用されている。

91 A. D. Clarke, *A Pauline Theology of Church Leadership*. 53. Campbell, *op. cit.*, 183-93からの引用である。

ような多様な問いを持ってパウロ文書における「長老たち」の不在の問題を考えてみよう。

パウロが「長老たち」という用語を避けたのは意図的であり、新しい霊の運動体である教会を古いユダヤ教モデルでは理解できないとパウロは考えたという解釈がある。これは霊と秩序を対立関係で考えがちなプロテスタント的解釈であり、R.ゾーム⁹²、M.ヴェーバー⁹³を継承したカンペンハウゼンの理解である⁹⁴。F.Ch.バウル、A.リッチェル、J.B.ライトフッド、E.ハッチなどもこの流れにあり、その前提は、「教会の組織化の増大が、その霊的力の減退を伴う⁹⁵」というものである。最近では、J.ダンは、「パウロは、ユダヤ教において礼拝あるいはシナゴグの指導性あるいは祭司的役職を示していた用語を一貫して避けている⁹⁶。」とし、教会の働き (ministries) のカリスマ的特性を強調し、「(パウロの) 定義による使徒たちは、繰り返し不能であり (終末論的使徒たち)、そして教えがカリスマ的教えを含んでいるので、『役職・公職』(office) という言葉は、職務 (ministry) というパウロ的概念のいかなる記述からも完全にうま

92 R. Sohm (1841-1917) は法学者であるが、教会の法的規制は、教会における霊の自由に反するとし、制度化される以前の初代教会こそ真実な教会であると考えた。

93 M. Weber (1864-1920) はゾームと同時代人であるが、『経済と社会 理解の社会学概説』9章の『支配の社会学』(世良晃志郎訳) 創文社、1967年で、支配の正当性の根拠として「カリスマ」、「伝統」そして「法」を挙げ、預言者や政治家などカリスマ的指導者が社会改革を行い新しい共同体を形成するが、時間が経過すると、それが「伝統化」(routinization) され、さらに「法制化」によって合理化されると理解した。むしろ、ここではヴェーバーは社会学的概念としてカリスマを用いているので、神学的解釈としてのパウロのカリスマ理解を同列におくことはできない。

94 Von Campenhausen, *Ecclesiastical Authority and Spiritual Power in the Churches of the First Three Centuries*. 76. キャンベルはこのような霊と秩序の二元論はゾームとバウルに遡ると考えており、これでは、バプテストとしてカリスマ運動に対抗できないと考えている。Campbell, *op. cit.*, 1-19の Introduction でこの主張を展開し、その批判を彼の出発点としている。カンペンハウゼン自身はヴェーバーのシェーマを用いてはいない。

95 Campbell, *op. cit.*, 3. J. B. Lightfoot, *Epistles of St. Paul to the Philippians*. London/Macmillan, 1889, E. Hatch, *The Organization of the Early Christian Churches*, London/Revingtons, 1881.

96 J. Dunn, *Jesus and the Spirit*. London/SCM, 1975, 285

く避けられている。97」と主張している。すると結果的に、牧会書簡は、霊の働きからすれば「色褪せたヴィジョン」あるいは「吹き溜まり」(drift)であり、「長老たち」の出現の他何ものも提供していないことになる98。

あるいは、パウロが手紙を当てた諸教会はテサロニケ、コリントなどのヘレニスト社会における教会であり、イグナティオスはアンティオケア出身で、エフェソは含むものの小アジアの教会に宛てた手紙を書いているのであって、教会が置かれた社会的・歴史的位置が異なっていたとも解釈可能であり、パウロが「長老たち」に触れていなくても、「長老たち」と「監督たち」の融合はごく自然の成り行きであり、パウロも暗黙裡に認めていたと考えることもできよう99。あるいはパウロの教会にも、「長老たち」は言及されてはいないが、実際、「長老たち」が存在していたかも知れないという推測もまた、上記のキャンベルの「長老たち」の歴史の研究から正当性を持つかも知れない100。そこからして、「(パウロの)会衆において指導力を持つ人々が存在している可能性もあるが、そのような人々がどのように任命されるかという問いは「むだな、尋ねら

97 J. Dunn, op. cit., 291. ダンはここでハンス・キュンク『なぜ祭司たち?』から「教会的役職 (office) は新約聖書的概念ではなく、後の諸熟慮から起こった問題のある概念である」(ET 1972, 26) を引用している。

98 Dunn, op. cit., 345, R. J. Banks, Paul's Idea of Community. Exter/Paternoster, 1980, 192. Quoted by Campbell, op.cit., 99.

99 J. Roloff, 'Amt, Aemter, Amtverständnis im neuen Testament,' in: TRE, Vol. II, pp.509-33. 523. 「より広い前線 (フロント) では、パウロ後の時代に、パウロの監督組織のパレスチナの古い組織との融合が成し遂げられた」。 (松見訳) Campbell, op.cit.,98 の注 4 で引用されている。

100 しかし、パウロによって言及されていないのは、「長老たちが重要ではなかった」という理由に見出すこと (Burtchaell, From Synagogue to Church. Cambridge/CUP, 1992. は困難である。彼は初期のユダヤ人改宗者はシナゴークに倣って「長老たち」を要求したが、パウロは長老たちの存在に重きを置かなかったというのである。(188.) 彼らは存在 (present) したが、周辺的存在 (peripheral) であるというのである。重要であったのは、使徒たち、預言者たち、そして教師たちらの「カリスマ所有者たち」であり、このようなカリスマ保有者が教会を導いたのであり、長老たち、監督たち、執事たちは単に彼らの傍らにいる存在であった) (350) この理解もゾームの線上にある霊と秩序の二元論である。

れるべきでさえない¹⁰¹」ものであったと主張され、霊の自由の議論の強化に用いられることも可能であろう。

しかし、B.ホルムベルクは、ヴェーバーを批判し、指導者自身がその職務の継続を考慮し、なるべく永続する共同体を建てることを望むことを過少評価すべきでなく、彼あるいは彼女の直接の後継者たちの人格的かつ財政的動機づけの役割を過剰評価すべきではないと考えるのである¹⁰²。歴史形成上、人の集まりでもある教会が慣習化すること (routinization) は避けることはできないが、それをすべて否定的に評価する必要はないであろう。G.タイセンもまた、パウロは彼の手紙においてある一つの「共同体組織者」であったことを示していると主張している¹⁰³。パウロの教会形成は、福音宣教の単なる「副産物」(a by-product) ではなく、教会は「他者のためにある教会」あるいは「他者と共にあるべき教会」ではあっても、パウロの福音宣教の「目標」(the goal) であったからである¹⁰⁴。そしてパウロの家の教会においては、教会員をもてなし、あるいはその富をパウロと教会のために喜んで捧げる人たちがおり、教会の指導性はその初期の段階からそのような信徒たちの手に委ねられたのであろう。パウロの教会における指導者については、松見 俊「新約聖書におけるエписコスについての一考察」を参照のこと¹⁰⁵。

このような議論になると、教会の職制理解は、「長老たち」という言葉の使用の有無や語義の問題を超えて、キャンベルがヘレニズム社会における「長老たち」の最後で、文化人類学や社会学からの議論を持ち出したように、別の視点を持たねばならないことであろう。キャンベルは彼自身の提案として、「人々を最初の世代に長老たちと呼ぶことを不適切にし、第二世代に不可避的にする

101 Campenhausen, op.cit., 67.

102 Holmberg, Paul and Power. Lund/CWK Gleerug, 1978. 165. Quoted by Campbell, op. cit., 104.

103 G. Theissen, The Social Setting of Pauline Christianity. Edinburgh/ T & T Clark, 1982.27-67.
参照 M. Y. MacDonald, The Pauline Churches. Cambridge/CUP, 1988.53.

104 Campbell, op. cit., 104.

105 所収：『西南学院大学神学論集』第72巻 2015年 42-45頁。

両方の要因は、最初期諸教会の家の構造 (the householdstructure) である。¹⁰⁶』と言うのである。地方教会が一つの大きな家に限定された段階では、その家の主宰者が教会の指導性を提供した。誰かの家で会合していたその教会は、その家主 (監督) の主宰の下で集会を持っていた。この時点では、「家の主宰者」は近隣諸教会の代表者として「長老会」に所属してはいない。長老は個人のことではなく、ある集団の呼称であるから、第二段階として、近隣地域に家の集会が増加してくると、ある家の教会の「監督」は他の家の監督たちと「長老会」を形成することによって「長老」と呼ばれることになるのである。

このようなキャンベルの理解、つまり、あらゆる家の教会の長が(監督であったとしても) 必然的に長老たちであったわけではないという主張に対して、クラークは、パウロの手紙は「多元的な家の諸教会からなる全共同体に宛てられており、たぶん、家の諸教会の長たちの総計である、長老会たちの協議会を認知していた可能性がある」¹⁰⁷と言う。クラークは、牧会書簡・共同書簡もパウロ書簡と一括りにして研究しており、最新の方法論とは距離があるが、彼はローマ書とIコリントは特に、多元的家の教会の単元集合体 (multiple domestic units) に宛てて書かれていると言う。

キャンベルの主張がより史実に近いのか、クラークの主張がより近いのかは別にして、キャンベルが、イスラエルとギリシヤ・ローマ社会における長老たちの研究から、教会においてもまた、「長老たち」は「指導性それ自体に関するある役職 (an office of leadership itself) について語っているよりむしろ、(尊敬される) 指導者たち(leaders)を語る方法なのである¹⁰⁸。」と主張することに耳を傾ける価値はあろう。また、「牧会書簡は、監督たちと長老たちを融合させるためにではなく、[家の教会が多くなり、単独の家の監督ではケアが間に合わなくなって任命されるようになった] 新しい監督 [キャンベルは bishop という語を避けてあくまで overseer を用いている] の権威を正当化するために書

106 Campbell, op. cit., 126.

107 A. Clarke, op. cit., 53.

108 Campbell, op. cit., 140.

かれている」¹⁰⁹と解釈していることにも注目すべきである。

すると、キャンベルにおいては、「監督」は初期の役割（各個の家の教会の指導者）から新しい役割（家の集合体としての教会を主宰する）へと変化したことになるが、そうであれば、パウロの教会における「長老たち」の存在は、牧会書簡が、わざわざユダヤ教的秩序としての「長老たち」と霊のカリスマ共同体の指導者としての「監督」とを調停する必要もないのであり、パウロ自身の考えに矛盾はしないことになろう。こうして、「プレズビュテロイ」と重複していた「エписコポイ」の中から単数の「エписコロス」が選ばれるようになったのである。最初は、地方の指導者たちはそれぞれの「家の教会」を代表して共に行動していた。このような段階は、パウロが舞台から去ったときに頂点に達したのであろう。パウロは、彼が開拓した教会に、教会秩序よりも福音伝道に関心のある部外者として手紙を書いた。結果的に、彼は人々を、その信仰共同体の長老たちというより、仲間の働き人、兄弟姉妹たち、そして神の僕らと看做していたのである。

私見では、R.ゾームやF.C.バウル、そしてJ.ダンのように、霊の働きを教会の秩序・教職制と対立的に考えるという前提から新約聖書の教会を考えるのではなく、冷静な歴史学的結論としては、E. シュヴァイツァーが語るように、新約聖書においてははまだ固定化された職制は存在していないこと、しかし、「教会は一定の秩序を持たねばならない」こと、そして、「要するに教会は、ローマとゾームの間を通して、その進むべき道を探し求めなければならない。そのことを教会ができるのは、それが決然として、神の自由と誠実に基礎を置いて生き、もはやその職制や、もはやその宗教的活発さに基礎をおかない場合だけである。いかにしてそれを確実に行き、証しすることができるか、教会はそれを常に新しく問わねばならない¹¹⁰。」という結論が神学的にも、たぶん、新約歴史学的にも妥当である。キャンベルの「長老」理解が正しいにせよ、そして、それが長老制という制度を取らないバプテストにとってありがたい研究であるにせよ、シュヴァイツァーの言うように、「神の自由と誠実に基礎を

109 Campbell, op. cit., 196.

110 E. シュヴァイツァー『新約聖書の教会像』358頁。

置くこと」, 松見の言葉で表現すれば, 「福音宣教とそれに根差した教育と牧会が教会形成上, 指導者たちに最も重要な働きであること」を見失ってはならないのである。

それでは, 以上の視点を持って, しかし, それをも問う視点で, 使徒後の初期教会における「長老たち」を考察しよう。

8. 使徒後の初期教会における「長老たち」

8-1 クレメンスにおける「長老たち」

クレメンス (30年頃~101年頃) は, ローマの主教であり, 「使徒教父」と呼ばれており, ペトロから3代目の主教であったと言われている¹¹¹。クレメンスの名による文書は多いが, 65章からなる『第1クレメンスの手紙』のみが真正なものとされている。これはローマ教会からコリント教会に送られた公開書簡であり, この文書による「長老」の位置づけは, Iペトロのそれに近い。理由はよく分からないが, コリント教会から暴力的に排斥された「長老たち」を弁護している。「長老たち」はここでは, より年老いた者として尊重されるべきであるとされ, 不遜な者たちは彼らへの従順を学ぶべきことを教えている (1: 3)。彼らは一つの家父長的集団を形成しており, この集団の中に, 監督たちと呼ばれる指導者たちがいた (44: 1, 6)。このような教会秩序は, クレメンスによれば, 礼拝儀礼 (ライトウルギア) を司るために, 神によって制定されたもので, ヘブライ語聖書のイスラエルの秩序にならったものである (44: 40)。そして, この秩序は, キリストと彼の使徒たちによって継承されたものであり, それゆえ, 排斥された「長老たち」は再任されるべきであると主張されている (57: 1)¹¹²。

111 イレナエウスによれば, 3代目であるが (Adv. Haer. III, 3,3) テルトウリアヌスによれば, 2代目)。

112 Bornkamm, op. cit., 672-673. H. Bettenson (ed.), The Early Christian Fathers. Oxford, Oxford Uni. Press, 1969.

8-2 『ヘルマスの牧者』における「長老たち」

この文書は、おそらく、120~140年頃、ローマで書かれた黙示文学的な文書である。ラテン語訳では、5編の黙示 (Visiones)、12編の戒め (Mandata)、10編の譬 (Similitudines) に分かれている。この文書においては、いまだ、預言者の霊の働きが許容されている一方 (Visiones 3, 8, 11)、教会の秩序と均衡しており、牧会的働きを持つ「長老たち」¹¹³ (監督たちと執事たちを含む¹¹⁴) の一団に言及している。彼らは使徒の後継者としてその尊厳が基礎づけられている (Visiones, 3,5,1)。真正の預言者たちは謙虚でなくてはならず (Mandata 11:8)、預言者たちと長老たちとの間ではいかなる葛藤もおこるはずがないと期待されている。

8-3 イグナティオスにおける「長老たち」

イグナティオス (35年頃~107/17年) はアンテオケの主教であった。彼は7つの真正書簡を書いているが、単一の監督と彼の下での協議会 (synedrion) として機能する「長老会」 (Presbyterium) が存在していた (Philadelphos, 8, 1)。教会は霊的秩序としての彼らに従わねばならない (Ephesios, 2,2, Magnesios 7,1, Trallianos 2,2, Polycarpum 6,1)。「イグナティオスの教会と職制理解にとって本質的なものは、会衆のこの服従義務が、長老を敬うべきである (I ペトロやI クレメンスのように) という戒めにでもなく、伝承の担い手たちとしての使徒たち、あるいは、権威者によって任命された教会法的議論にでもなく、ただ、教会の一致の秘義 (das Mysterium der Einheit der Kirche) から基礎づけられており、そして、それは、神、キリスト、そして、使徒たちのヒエラルキー (Zuordnung) の秘義を反映しており、そして、儀礼的-永劫的リアリティ (kultische-aeonenhafte Wirklichkeit) として現れている¹¹⁵。」とボルンカムは言う。イグナ

113 「長老たち」は、教会の指導者たちとして「牧者」と呼ばれ、常に、牧会的機能に関係している。(Similitudines 9, 31, 5f)

114 監督と執事は貧しい者を支援する責任を持ち、教会会衆の財務を担当している。(Visions 3, 5, 1; Similitudines 9, 26, 2; 27, 2.)

115 Bornkamm, 675.

ティオスは単一主教制についての最古の文献である（長老たちの中から一人の監督を選ぶことは、I テモテヤテスに見られるとすでに見てきたが）。彼は、アンテオケの主教であり、小アジアの伝承に距離的には近いが、その見解がかなり、資料的には孤立しており、単一主教制と三職制論の史的根拠をイグナティオスとするには無理がある。

8-4 ポリュカルポスにおける「長老たち」

クレメンスと並ぶ、「使徒教父」に数えられるポリュカルポス（69年～155/56年）はスミルナの主教であった。使徒ヨハネの弟子としてヨハネから直接主教に任命されたとも言われ、イレナエウスの師であったとも言われている。イグナティオスとも親交があり、前述したように、彼には『ポリュカルポスへの手紙』がある。

ポリュカルポスには『フィリピへの手紙』がある。この手紙において彼は、イグナティオスのように単一の監督には一切言及せず、執事と長老のみについて語っている（フィリピ5、2、5、3）。確かに、ポリュカルポスは、これらの二職制に従うように命じてはいるが（5、3）、監督の下でのヒエラルキーは存在しない。われわれはパウロの手紙において「監督たちと執事たち」が言及されているので、フィリピ教会に監督が存在しなかったことは考えにくい。たぶん、家の集会の主宰者として多様な働きを総合的に担っていたフィリピの監督たちは、時間が経つに従い、より広い意味での「長老会」に吸収されてしまったのかも知れず¹¹⁶、また、ポリュカルポスの場合に、この「長老会」に監督主義的名称を与えなかったのは、彼が「監督」という称号が権威主義的になること（overseer から bishop へ）を避けていたと理解できよう。こうして、ポリュカルポスにおいては、監督たちと長老たちは事実的に同じものであり、長老たちの働きには、財政的管理、訓練、牧会、そして、説教が含まれていた（11、1-2）。

116 Bornkamm はカンペンハウゼン 130 注 1 を引用している。「長老主義は、その後、パウロ時代のより古い秩序を吸収・解消してしまった」。

8-5 パピアス, イレナエウス, アレクサンドリアのクレメンス, そして, オリゲネスにおける「長老たち」

8-5-1 パピアス

パピアス (60/75-130/165年) は小アジア・フルギア州のヒエラポリスの主教である。彼はポリュカルポスと同時代の人であった。イレナエウスによると、彼もまたヨハネの弟子であった。彼自身が直接書いた文献は残っていないが、エウセビオスによると『主の言葉の注解』5巻¹¹⁷を書いたといわれ、その断片が、エウセビオスの『教会史』とイレナエウスの著作の中に保存されている。エウセビオスにおける『主の言葉の注解』への序文において、パピアスは、彼が「かつて長老たちから学び、かつ保存してきたあらゆるもの」を彼の注解と組み合わせて (zusammenstellen mit)、そして、そうすることによって、その真理を保証したい¹¹⁸と語っている。こうして、パピアスにとって、「長老たち」は単なる群れの指導者としての年長者・代表者ではなく、真正の伝承の信頼できる教師たちを意味していた。彼らは、使徒たちではないが、使徒たちの直接の生徒たちであり、諸各個教会における職務の担い手というよりも、使徒や霊的預言者のように巡回する伝承の担い手、あるいは諸教会を超えた共通の伝承の保証者なのである。そして、真正の伝承が霊によって「注解されること」に結ばれていることも興味深い。

8-5-2 イレナエウス

イレナエウス (130年頃-200年頃) はリヨンの主教であり、小アジアの神学を集大成をした人である。若い時、ポリュカルポスの薫陶を受けているので、ヨハネ → ポリュカルポスの伝統を受け継ぎ、他面、リヨンの主教であったから、東方と西方の神学的伝統の接点でもある。彼もパピアスのように、「長老たち」を使徒たちの弟子たちであったと位置づけている (『異端反駁論』 V,

117 これは、福音書には伝承されていない主の言葉が収集されており、貴重な資料とされている。

118 Bornkamm, 676.

5, 1)。これらの長老たちは、偽りの長老たちと区別され、パピアスがそうしたように、イエスの行動と教えと、聖書の真の解釈の両方を提供する。異端に直面して、イレナエウスは、諸教会が長老たちに従うことを勧めているが、それは単に、「使徒的教えの継承」だけではなく、監督的職務 (*bischoefliches Amt*) にも基礎づけられている。むしろ、イレナエウスは、ここで、職務的カリスマを「真理のカリスマ (*charism veritates*)、つまり、伝承された教えから区別することを意図していない」¹¹⁹。イレナエウスにおいては、このような長老たちと監督たちは等置されているが、それは教会の教職秩序というよりも、イエスにおいて啓示された真理の「弁証的、論争的理由」においてなされている。「この等置は、疑いなく、長老がより古い世代の教師として、そしてまた、教会の指導的な教職の保持者としての両方の意味を持つゆえに可能となっている。しかし、特に、初めは、ある自由な教師の地位であったものが、そのうちに実際に確実になされた教職化された事実によって (*eine inzwischen sicher wirklich vollzogene Klerikalisierung*) 可能になっているのである」¹²⁰。

8-5-3 アレクサンドリアのクレメンス

アレクサンドリアのクレメンス (150年頃-215年頃) は、オリゲネスの師である。たぶん、アテネの異教徒の家庭で生まれ、育った。それゆえ、パピアス、イレナエウスのように、直接、使徒伝承に連なっているわけではない。しかし、パピアスにおいてそうであったように、「長老たち」の教師としての職務はいまだ公的役職というより自由なかたちを保持していた。彼は、「長老たち」を過ぎ去った時代の教師たちと呼んでおり、彼らは口伝か文書によって初期の記録と真正な聖書解釈を伝承してきた。長老たちは、「祝福された教理の真実の伝承を保存したのであり、彼らはそれを、父の子らが伝承してきたように、聖なる使徒たち、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、そして、パウロから受け取ってきたのであり、…そして、このように、神の助けと共に、あの族長的、使徒的種を

119 『異端論駁』IV, 26, 2. Bornkamm, op.cit., 678 に引用されている。

120 Bornkamm, 678.

(われわれの中に) 植えるために到来したのである」¹²¹。アレクサンドリアのクレメンスにおいては、イレナエウスとは違い、「長老たち」による教えの継承は、監督的職務の継承とは決して結びつけられていない¹²²。教える職務は教会秩序的職務との関係においては自由な存在である。クレメンスにとっては、教会秩序的職務は天の世界の単なる「型」でしかないのである。このような主張には新プラトン主義の影響があるのかも知れない。真の長老や執事は、ヨハネ黙示録の天にいる二十四人の「長老たち」に近いのである。クレメンスは、「歴史的」継承よりもグノーシス的な興味が強いと言えるかも知れない。しかし、彼は、皮を切らして骨を切るような仕方でもグノーシス主義を批判するのである。グノーシス（靈知）はキリスト教的完全の主要な要素ではあるが、それはあくまで神の啓示に関する使徒的証言に基づくものであり、信仰は真のグノーシスより劣ったものではないのである。彼はこの立場をヘブライ語聖書と新約聖書の正典を受容することによって主張している。このように理解するとき、ボルンカムは、クレメンスと彼の後継者（聖書の類比的解釈）の立場は、ラビ的教えの伝承理解に類似していると主張している¹²³。

8-5-4 オリゲネス

オリゲネス（185年頃～254年頃）は、アレクサンドリア学派の代表的神学者である。彼はクレメンスの学校で学び、彼の後継者となった。オリゲネスも、クレメンス同様、彼の教説の正当性（正統性）のために「長老たち」と呼ばれたより初期の人々の釈義に訴える場面がある¹²⁴。しかし、オリゲネスはもはや、教会階層的教職に対立はしないが、そこから独立している、カリスマ的で、自由な教える教職について語らない。オリゲネスにとっては、教師たちが教会教職制に所属していることが重要であり、かつ自明のことである。そして、この

121 Stromateis 『ストロマティス』 I, 11, 3. Bornkamm, 678-679 に引用されている。

122 Bornkamm ここで Kampenhausen 221.を引用している。

123 Ibid., 679.

124 ボルンカムは直接オリゲネスから引用せず、A. Harnack, der kirchengechichtliche Ertrag der exegetischen Arbeiten des Orig I, TU 42, 3(1918) 28 から引用している。

霊的な教える職務と教会教職制との関係は、按手礼（叙階）によって橋渡しされる。彼は自ら去勢したほどの禁欲者であり、博学ではあったが、アレクサンドリアの一人の未受按教師であることに満足せず、教会教職的「長老」としての叙階を求め、最終的に、カエサリアでこれに与った。

8-6 シリアの『ディダケー』とヒッポリュトスの『使徒憲章』における「長老たち」

『ディダケー』はシリアにおいて書かれたとされ、『十二使徒の遺訓』と呼ばれているが、紀元一世紀末か二世紀初期に書かれたものと推定されている。

『ディダケー』は、イグナティオスに似て、監督の至上権を強調しているが、イグナティオスとは違い、それを教会の秘義に結び付けているのではなく、彼の地位の教会法的基礎づけを強調し、サクラメント的、教会管理的な地位とサクラメンタルな諸機能を強調する¹²⁵。「長老たち」はその職務に参与するが、あくまでも監督によって派遣された使節としてであり、監督に従属している。

ヒッポリュトス（170年頃～235/36年）は、教父の一人で、ローマの長老であったが、生まれはギリシヤであり、『使徒憲章』¹²⁶では、彼の教会秩序理解は、東方の教会教職的権限保有者（die kirchlichen Rechtsbuecher des Ostern）のイメージの上に立っている。教会の秩序は、サクラメンタルな叙階によって聖職階層化され（durch sakramentale Weihen abgestuften Klerus）、そこでは、監督（主教）だけが、大祭司として、職務を委譲する権威を持ち、民数記11：16以下、24以下にあるように、大祭司モーセに従属する「長老たち」は、相談役として、霊の一部に参与する者たちとされ、バプテスマを授け、ユーカリストに

125 ボルンカムは H. Achelis und J. Flemming, "Die syr. Didaskalia," TU, 25, 2(1904), 270 から引用している。

126 ヒッポリュトスの『使徒的伝承』（Apostolikē paradosis）は 215 年頃に書かれた真作であるとされるが、ここで、ボルンカムが話題にしていると思われる Kirchenordnung は『使徒憲章』（Constitutiones Apostolorum）であり、これは 4 世紀後半のものであり、その礼拝学的、教会秩序的権威は昨今では、疑われている。

において助手をする (杯とパンの分餐の管理) 祭司的働きを担うのである¹²⁷。

ボルンカムは以上の「長老」の歴史は、『ディダケー』と『使徒憲章』においてその発展の一つの結論に到達したと言う。

8-7 まとめ

ローマのクレメンスにおいては、集団指導体制としての「長老たち」への言及があり、その中に監督が立てられている。彼らの主要な働きは礼拝式の司式・管理である。

『ヘルマスの牧者』は、監督たち、執事たちと共に、牧会的働きを担う「長老たち」に言及している。監督と執事は教会の財務を担当し、貧しい人々の支援を行う。「長老たち」は牧会を行い、霊の働きとパンの働き、あるいは教会の管理の両方がバランスしている。

イグナティオスにおいては、単一の監督の下で機能する「長老たち」あるいは「長老会」への言及がある。しかし、このような職務への担い手の服従義務は、使徒たちに繋がる伝承の担い手であること、教会により選立された法的根拠にではなく、キリストの体としての教会の一致の秘義に根拠づけられている。

ポリュカルポスにおいては、単一の監督への言及は不在で、長老と執事のみ言及している。彼においては、監督と長老はほぼ同義語であり、財政的管理、訓練、牧会、そして説教を含む総合的な指導の働きを担っており、現在の「牧師」の職務に近いと言えよう。

パピアスにおいては、「長老たち」は直接、使徒たちに連なる「真正の伝承者」である。

イレナエウスにおいて、「長老たち」は、真正の伝承者であるばかりか、異端に直面して教会を監督する者たちでもある。自由な教師としてのキリスト証言の伝承者が教職化された指導者となったのは、権威主義的なヒエラルキーの形成というより、異端に対する「弁証的・論争的」理由からである。

127 ボルンカムは、F. X. Funk, *Didask. Et Const. Ap.*, II (1905) 32, 33, 46 から引用している。

アルクサンドリアのクレメンスにあっては、「長老たち」は真正な使徒的伝承の継承者であるだけではなく、伝統の「靈的」解釈者でもあるのであり、伝承を新しい時代において解釈することが重要な課題なのである。これに対して、教会秩序的職務は天の世界の単なる型に過ぎず、イレナエウスとは違い、「教える職務」の継承（伝承の靈的解釈）は、監督的職務とは結びつけられていない。

この職務を結びつけたのは、オリゲネスである。彼は「教える職務」を教会の監督的職務と結びつけ、その橋渡しをする「按手礼」（叙階式）を重視した。

『デイダケー』とヒュポリュトスにおいては、監督の権限が強いが、それをイグナティオスのように教会の秘義にも、また、パピアスのように使徒に繋がる真正の伝承者に求めるのではなく、それ以上に、教会法的根拠づけと sacrament の執行権と結合した。Sacrament も教会の管理も共に sacramental なものなのである。「長老たち」はこのような秩序における監督たちの補助者であり、執事はこの補助者の補助者になっていくのである。

追補

B. S. Stephen は、1976年、『未受按の長老たちと更新される共同体』という本を出版して¹²⁸、第二ヴァチカン公会議後のローマ・カトリックにおける信徒運動の重要性を説いている。

第1章は、「更新諸運動と更新された諸共同体」と題して、ローマ・カトリックが第二ヴァチカン公会議後、新しい社会状況に合うような教会の「牧会的構造」を考え始めたことを伝えている。それはキャンベルと英国バプテストに挑戦したカリスマ運動への対応でもある。つまり、放置すれば分派活動に繋がりがかねない運動を如何に既成教会と関係づけるかという課題である。しかし、歴史的には、ローマ・カトリック教会は多くの更新運動を旨く教会の生に統合し

128 Stephan B. Clark, *Unordained Elders and Renewal Community*. New York/Paulist Press, 1976.

てきた。4世紀の禁欲運動がその良い例であり、また、13世紀の托鉢運動に対する対応もそうであると主張している。ステファンは、按手を受けた司教、司祭あるいは牧師だけがキリスト教の指導者たちではなく、ある家族の長老たちも指導力を発揮してきたと言う。教会の課題は、新しく更新されつつある霊の運動を如何にして全体としての教会に統合するかということである。彼は、禁欲運動が教える3つの原則を挙げる。

- (1) 按手を受けていない長老が、教会の伝統内では、ある重要な人物とみなされ、決して酷く扱われない。按手されていない長老たちは、特に、ある新しいあるいは変化する状況においては牧会的フレキシビリティをもたらす。
- (2) ある更新された共同体を全体としての教会に関係づける通常の方法は、その共同体の指導者たちの按手によって、彼らが置かれている管区の長老会へとその運動を結びつけることである。
- (3) この更新された共同体は、全体としての教会の牧会力と受按指導者に対してある重要な貢献をするように整えられるべきである¹²⁹。

以上の「導入」によって、彼は、第2章において、「更新運動としての禁欲運動」、第3章において、「教父的伝統における未受按の長老たち」、第4章において、「叙階式と更新された諸共同体」、第5章において、「更新された諸共同体は、指導者たちに貢献する」、を語り、最後に結論を導き出している。

初期の禁欲運動においてその指導力を発揮したのは、叙階されていない信徒としての「長老たち」であったことは周知の通りであろう。大アントニウス(251~356年)はその例である。パコミウス(290年頃~346年)もまた「改善された牧会体系」を確立し、幾千の人々の効果的なキリスト教の牧師となった人である。彼も叙階されていなかったし、現に、謙遜からして叙階そのものに抵抗した。ニトリアのアモン、ヒラリオン(291~371年)、ジュリアン・サバ、アブラハム・キュドナイア、シモン・エストリア、そしてベネディクトゥス

129 B. C. Stephen, op. cit., 8.

(750~821年)は、長老たちとして機能したが、決して叙階されていなかった最も顕著な人々であった。エジプトのマカリオス、アレクサンドリアのマカリオス、カエサリアのバジル、ジェローム、アウグスチヌス、サバス、そして大グロゴリーは、彼らの禁欲的共同体において長老として奉仕するように叙階される以前に、あるいは、ある地方教会のために叙階された長老になる前に、ある時期、叙階されない長老たちとして機能していた。

修道院集団の創設者あるいは初期の指導者であった、この叙階されていない長老たちは、広い射程の牧会的機能を行行使した。事実、最初の諸世紀の長老たち(按手を受けた長老たち)は通常、ユーカリストを司式したり、教会法的に懺悔者と和解させたりはしなかったが、この叙階されていない長老たちは、初期教会における長老たちのあらゆる通常の牧会的機能を行行使したのであり、このような働きは当時の司教たちに支持されていた。

それに対して、「補助的長老たち」が存在していた。彼らは、長老たちの集団の一部分として牧会的指導に貢献した人々である。ほとんどの禁欲的共同体は、全体としての兄弟たちに牧会的関心を寄せた一群の長老たちを持っていたのである。叙階されていない長老たちの一団の存在は、村のパターンに従う共同体に容易に見出される。ニトリア、セルス、クレタはこの村体系に関して、最も文書の残された例証であるゆえ、彼らの指導者たちの構造の記録が残っている。すべてこれらの場所では、叙階されていない長老たちは、一人の叙階された「長老」(presbyter)の下で働いていた。カシアンの修道院において、われわれは、教える長老たちだけではなく、また懺悔の訓練を管理する長老たちを見る。長老たちは、彼らの共同体を統治し、金の分配の関心を持ち、必要な者たちのケアを行い、共同体の外的手段との関係を持ち、叙階の候補者を選ぶことさえしていたのである。

また修道院における叙階されていない長老たちの集団も存在した。彼らは禁欲的村の長老たちとは幾分異なった形で機能していた。修道院の成員たちはあらゆるものを共有していたので、最上級者が牧会的指図と同様、食料、着物、シェルターを提供することを含めてその共同体の全生活の責任を持っていた。結果的に、修道院の長老たちは、単に、共同体の一般的生活を監督することに

よって機能することはできず、村の長老たちがしたように何か悪いことを矯正することもできなかった。パコミウスは従属的な頭たちを伴う下部集団の明らかかな体系を用いた。各々の修道院は、その家の最上級者の下での30～40名の修道僧の家々に分けられた。それらの家の上級者は次に、その修道院全体の指導者に服従した。神父同様家の上級者も修道僧を教え、指図し、訓練した。そして彼らは明らかに「長老たち」と呼ばれた。バジルの規則において確立された体系は、禁欲的村のそれにより近いように見える。兄弟たちの間には2つの集団があり、指導者として委託された人々と従う人々とである。それらの指導性を委託された人たちは通常、superiorsとして言及されるが、時に、彼らは叙階されていないがpresbyteryとして言及されている。この集団は主要な指導者と共に存在し、兄弟たちのケアにおいて彼を補助した。

われわれが禁欲家たちの更新された共同体を研究するとき明らかにこの牧会的構造は、教会の構造のモデルとなった。一人の監督の代わりに、共同体の上級者 (superior) が存在し、多くの場合叙階されていた。この上級者と共に働いて、彼の指図の下で牧会的ケアを分け持つのが長老たちの一団である。彼らの現実の牧会的実践は、地方教会の間で彼らが多様であるように、多様であるが、パターンは同じである。禁欲的共同体は、明らかに、彼らが牧会的指導性を構想したときに、彼らの周囲の教会のパターンを採用したのであった¹³⁰。

そして、以上の歴史を踏まえてステファンは「並行現象」の叙述に移る¹³¹。その結論部分を書き留めておく。

多くの学者たちが、禁欲運動が反教會的あるいは反教職的であったという印象を創造するにちがいないと考えたが、禁欲運動が叙階された教職者の価値を認めなかったり、ある司教に服従することを拒んだりした例証は存在しない。尊敬と服従が司教と教職者に与えられた。尊重がまた叙階式のために払われてきた。…

われわれはここで、更新された運動に共通の一つの現象に直面させ

130 以上は、36～44頁の要約である。

131 44頁以下。

られる。更新のためのある運動が発展し、そして更新された共同体が生まれると、構造と秩序の問題が起こる。キリスト者たちが自然に採用するパターンは、「キリスト教的パターンであり、それは聖書において教えられ、より広いキリスト教共同体において従われたパターンである。…それらは、長老たちと牧会的権威と悔悟の訓練を持っている。…

しかし、同時に、カトリックの伝統においてはそのような共同体は全体としての教会のレベルにあるとは主張しない。彼らは教会内 (within the Church) の諸共同体 (communities) であり、司教 (the bishop) に服従する。…

叙階されていない長老の地位は、決して誤用というようなものではない。それは、むしろ、教父の伝統であり、教会内の真の奉仕の伝統であり続けてきた。さらにそれは、非常に自然な発展である。叙階されない長老たちは自然にある独特な状況の中で起こったことである。…

叙階されていない長老たちは、また実際に存在する指導者パターンを補完することができる。初期の司教たちは、通常禁欲共同体のために大人数の presbyters を叙階することを欲しなかった。あまりに数が多いと教会の牧会的指導性の中である不均衡を産み出す可能性があるからである。叙階されていない長老たちは、禁欲共同体に彼らが必要としていた指導性を、教区の presbyters の数を増やしすぎることなしに提供したのである。

以上の叙述は、ローマ・カトリック教会の「柔構造」を証言している。私たちは信徒数の減少や高齢化を嘆く前に、信徒たちのある人々が「長老たち」として如何に大きな可能性を秘めているか、また、信徒たちがいかに教会に居場所を見出し、その人自身の賜物を発揮できるかということに心を向けることができるのである。

結論

1. 新約聖書における教会と教会の秩序は、家共同体との類比で理解される¹³²。特に、教会で職務を担う人々の役割は、家の主人やその主人を補佐する役割に対応するかたちで定められている¹³³。こうして、家共同体と、新約聖書時代にかなりしっかりと確立していたその秩序が、教会の共同生活の基本モデルとなったのである。
2. とはいえ、むろん、教会とその秩序は、そのかしらである「キリスト」との関係において、そして教会の働きと職務は、「キリスト」の福音に応答する仕方で行われるのである。教会の秩序理解は、教会の本質をどのように理解するかに掛かっている。
3. 歴史的に考察すると、パウロの教会には「監督たちと執事たち」(エписコポイとディアコノイ)が存在していた。これと並んでエルサレムの原始キリスト教会と異邦人教会において「長老たち」が存在していたことも、ルカの記述や牧会書簡・共同書簡の証言によれば明白である。われわれはこの二つの体制が相互に融合しながら発達してきたこと、あるいはキャンベルが主張するように最初期の教会においては、「監督」が次の段階では、「長老たち」とある程度重複する内容を持っていたことを認めねばならない。
4. 最初期の教会の指導性は、3つの段階で発達してきたと推測できる。

1) κατ' οἶκον, 2) κατ' ἐκκλησίαν, 3) κατὰ πόλιν である。最初の段階では、使徒たちがいまだ全体を見渡す働きを行使しており、信徒数も家の数も小さく、それぞれの集まりの指導者たちは、少なくともある人々によって、ある場所で、「監督たち」= ἐπίσκοποι と呼ばれていた。この場合は、πρεσβύτεροιは集合的な呼称ではない。長老会集団が存在しないからである。これがIテサロニケやIコリントの状況である。

132 キャンベルは、シナゴグあるいは結社よりむしろ家 (household) が最初期の教会の発展を旨く説明しているという。Campbell, op. cit., 100.

133 F.ハーン『新約聖書神学I』475頁参照。

第二段階では、家の集会の数も増えて種々の家の指導者たちは、集合的に行動し、彼らは、πρεσβύτεροι と呼ばれた。そして、ある地域の家の集会の集合体の中で、一人の指導者が選ばれるようになった。「家」毎ではなく「一教会」にそれぞれ、監督たちが立てられる。「長老たち」は「監督」の下での牧会的、指導的役割を担っていた。これが使徒言行録における異邦人教会の内実である。

第三段階では、使徒たちの全体を見渡す働きが欠如し（投獄されたり、死んだりして）、信徒間の、そして、家の集会同志の不一致と不同意が生じてくるとἐπίσκοπος が、ある一つの町の一群の家の集会の全体的指導者となったのである¹³⁴。するとἐπίσκοπος も πρεσβύτεροι も従来の意味が変化し、ἐπίσκοπος はある町の教会の指導者となり、πρεσβύτεροι が家の集会の指導者たちとなってくる。これが、牧会書簡やイグナティオスにおける教会職制であるとキャンベルは主張している¹³⁵。

こうして、ἐπίσκοποι と πρεσβύτεροι は、融通性のある言葉であり、状況に応じて変化して用いられた。ἐπίσκοπος は、最初の一つの家の集会の指導者を意味していたが、その後、一つの町の教会の指導者に用いられるようになった。家の集会が数を増すと、それぞれの家の集会はἐπίσκοπος によって導かれてはいるが、πρεσβύτεροι は、その監督の下で、一緒に行動した家の教会の指導者たちを意味するようになった。その後、多くの家の集会を主宰するἐπίσκοποι の中からその町の教会におけるἐπίσκοπος が選ばれるようになった。するとἐπίσκοποι という複数形が背後に退き、πρεσβύτεροι が家の集会の指導者を呼称するために用いられるようになったというのである。キャンベルによれば、このような「長老たち」の使用法は一貫して、そのユダヤ教的、ギリシヤ的用法と同じである。つまり、それは常に、ある特別な役職 (office) の称号であるよりむしろ、まさに、榮譽的尊称なのである。

5. われわれは一方では、靈の自由と教会の秩序を対立的に考えることを避け

134 Campbell, op. cit., 204.

135 Campbell, op. cit., 205 の図表参照。

るべきであるが、他方、「長老たち」の用語法から、余りに安易に、エルサレム教会、ルカが描写するパウロの教会の「長老たち」、そして牧会書簡・共同書簡の教会秩序、そして使徒後の時代の教会秩序を直線的に描いてはならない。最初期の教会において「監督」と「長老」が相互互換的な指導者の呼称であるのか、どこか異なりながら融合していったのかを歴史的に判断することは困難である。課題は、イエス・キリストを通して福音として教会に与えられた豊かな務め (ministories) があること、そこからして、誰が誰と共にそれらの職務を分かち合うかを具体的状況の中で選び取ることである。「神学的アイデアと社会的リアリティの間には一つの継続的弁証法が存在するのである」¹³⁶。

6. それゆえ、新約聖書自体に、「監督」、「長老」そして「執事」の職制を固定的に認めることは困難である。
7. 「長老」制を持たないバプテストは、「牧師」が長老的な人格的な徳をどこか身に着ける必要があり、もし、長老教会のような治会長老的役割が必要であれば、執事にそのような指導性を求めるべきであろう。また、各個教会主義を採るバプテストは、自由と自立を大切にすることがゆえに、その危うさを自覚して、各個教会を超えた交わり、それが「連合」であれ、連盟であれ、を大切にすべきである。しかし、それらはあくまでも「交わり」であり、宣教推進の「協力体」であり、各個教会を超えた統治機能を持つべきではない。
8. バプテストは基本的に牧師や執事を「身分」ではなく、「働き」と考えているのであるから、「名誉牧師」あるいは「終身名誉執事」は伝統にそぐわない。しかし、「長老たち」が伝統的に、「尊称」であったとしたら、職を離れた「牧師」「執事」はそれなりに敬われるはずである。名誉牧師や名誉執事が、もはや、職務の担い手では「ない」という意味で、「名誉」牧師、「名誉」執事という名を使うことは否定されることはできないであろう。

9. 「協力牧師」という名称が元来、年金制度との関連で用いられてきた。しかし、立ち位置が難しく（牧師協力者なのか、主任牧師と教会員との間を取り持つのか、牧会をどのように分担するかなど）主任牧師との関係がぎくしゃくする可能性も多いので、働きの内容で、「協働牧師」という呼び方がより良いように思える。
10. バプテストの場合、「牧師」は身分ではなく、職務であるということは本質的立場である。しかし、尊敬できない人から、「み言葉」の説教、「み言葉」による「牧会」、「み言葉」による教育、「み言葉」による管理を受け取することは難しい。「み言葉」が重要であり、それによって教会が立ったり、倒れたりするのであれば、牧師も信仰のたたずまいをしっかりとし、信徒（牧師も信徒であるが）も「み言葉」の用を委託し、自らが選立しているがゆえに、牧師との適切な距離を持って、教会形成に参加すべきであろう。超高齢社会で、教会も高齢者が増加し、牧師も高齢化する中で、「長老たち」が尊敬されたように、それぞれが敬い、支え合う教会を形成できたら素晴らしい。仕事と人を分けてきたバプテストの伝統を生かし、一人一人が牧会・教会形成を担える姿勢と責任を持つと同時に、単なる近代の「目的合理主義」を超えた相互の温かい交わりが保たれたら、誰もが教会の交わりの中に「居場所」を発見できるであろう。

以上を、「長老たち」についての研究の結論としたい。